

特集

1 新課程対応

時数確保のひと工夫

2 実態把握

授業時数を圧迫する行事
教科外活動全体の再編が課題

— 読者アンケートの結果より

4 学校事例 1

会議の運営方法を見直し
職員会議を1時間短縮

北海道札幌市立宮の森中学校



8 学校事例 2

荒れのない学校づくりへ
「体験」を重視しつつ行事を精選奈良県川西町・三宅町^{しきげ}式下中学校組合立 式下中学校

12 学校事例 3

朝の「トレーニング学習」で
学力向上と業務平準化を両立長崎県大村市立^{こおり}郡中学校

16 学校事例 4

週30コマを「ゆるく」運用
行事等に充て学びの土台を築く

神奈川県横浜市立中山中学校

連載

20 ベネッセのデータでみる子どもと教育

保護者の意識

24 課題にフォーカス

保護者の信頼を得るための情報公開とは

現状 保護者のクレームは増加、情報公開を強く望む傾向に

学校事例 校内巡回やブログでの情報発信で生徒のリアルな日常を保護者に伝える
愛知県高浜市立高浜中学校

30 家庭学習 指導のひとさじ

学習は「団体戦」
校区全体で学習習慣を確立

秋田県秋田市立城南中学校

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

時数確保の ひと工夫

新学習指導要領の全面实施に向けて、
教育活動全体の質を維持しながら必要な授業時数を確保するには、どのように工夫すればよいだろうか。
行事の精選や会議の効率化などを進める4校の実践事例からヒントを探る。

Q

教育課程を編成・運用する上での 課題は何ですか（複数回答）

授業時数を確保するのが大変



「総合的な学習の時間」と選択教科等の位置付けを見直す必要がある



時間割の調整が複雑



学校の実態や方針に即した指導計画をつくる必要がある



教師の負担が増える、持ち時数に偏りが生じる



その他



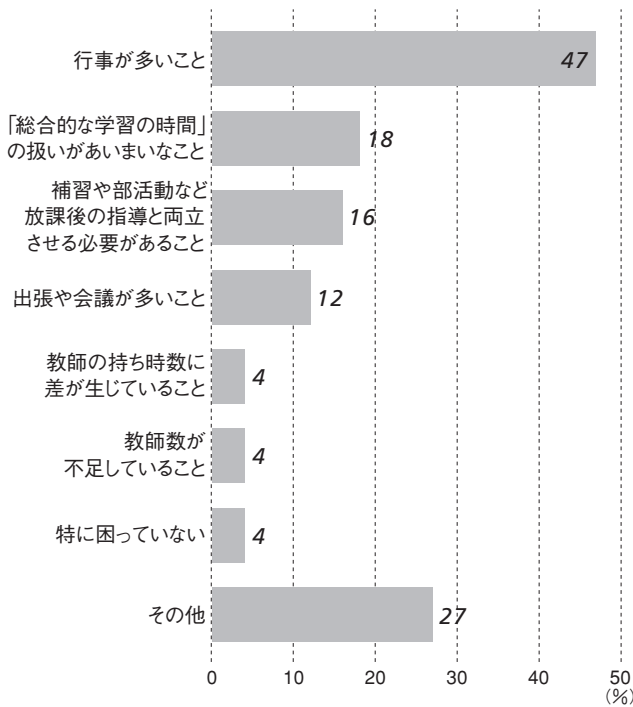
※「VIEW21」中学版 読者アンケート結果より
アンケート時期は2009年6月。「VIEW21」中学版Vol.1にアンケート用紙を同封し、ファクスにて回収。
対象は中学校教師。有効回答数は151

授業時数を圧迫する行事 教科外活動全体の再編が課題

読者アンケートの結果より

P.1のとおり、小誌が行った読者アンケートでは、教育課程の編成・運用上の課題として「時数の確保」が最も多く挙げられた。行事や出張・会議の多さといったこれまでの課題に加え、新学習指導要領への対応が時数確保を更に難しくしている現状が明らかになった。

Q.授業時数の確保を困難にしている要因は？
(複数回答)



「その他」の主な内容

教師間の意思疎通が不十分なこと、講師を確保しにくいこと、教師の持ち時数をこれ以上増やせないこと、インフルエンザ等による学級閉鎖・学年閉鎖

*2009年9月実施『VIEW21』読者アンケートの自由記述内容を編集部が集計。『VIEW21』中学版Vol.2にアンケート用紙を同封し、ファクスおよびインターネット上の回答フォームにて回収。有効回答数は113

授業時数の確保を難しくしている最大の要因は、行事の多さにあるようだ。読者アンケートの回答の詳細を見ると、「多過ぎるのでもっと精選すべき」「これ以上削減できない、したくない」など、今後の方策について意見が分かれている。

次いで多かったのが「総合的な学習の時間」の扱いがあいまいであることや、補習・補充学習、部活動といった放課後の指導との両立に関する内容だった。

この他、教員数の不足や時数増等に伴う更なる多忙化や、生徒と向き合う時間の減少といった、既に常態化している中学校現場全般の課題と関連付けた回答も見受けられた。また、少数ではあるが「特に困っていない」という回答もあった。

P.4から紹介する4校への取材を通じて、「授業日数を増やす」「授業時数を増やす」「校務を見直す」という課題への対応方針が浮かび上がった。各校とも、自校の生徒や教師の状況、更に学校の特徴も踏まえた上で、教育課程を少しずつ工夫し、時数を確保している。

現状と課題

授業時数の確保に関する読者の悩み (編集部まとめ)

行事が多い

もっと減らすべき、減らせるはず

- ・行事とその準備に時間をかけ過ぎている。もっと効率化しないと授業がカットされる一方になってしまう
- ・総合学習や特活の在り方を踏まえて精選したいが、出来ない

これ以上減らすべきでない、減らせない

- ・これ以上、行事を減らし、内容を工夫するのは困難。教育的効果からも簡単に削減するわけにいかない。しかし、授業時数の確保のためには行事を精選しなければならず、準備や練習の時間を減らさねばならないというジレンマがある

「総合的な学習の時間」の扱いがあいまい

内容を減らす必要がある

- ・今まで「総合的な学習の時間」で、発表力、表現力を育てていた。それに代わる時間を教科指導で行う余裕がない

他教科等との役割分担と時数配分が難しい

- ・学活、道徳、「総合的な学習の時間」の時数配分があいまいで、終わってみれば「学活」らしき活動、あるいは「特活」として教育課程外で確保していることが多い。それだけ必要性も高いといえる
- ・学校裁量による選択教科と総合学習の時数をどうするかで、校内でも判断が分かれ困っている

教員数の不足、多忙の常態化、新教育課程への対応

放課後の指導との両立が必要

学力保障への不安がある

- ・放課後や選択教科で行っていた補充的な学習の時間が取りにくくなり、授業だけで学力差を改善しきれない

生徒の活動時間が圧迫される

- ・6校時まである日が増え、部活動や生徒と活動する時間の確保が難しい

出張・会議が多い

出張が授業時数に影響

- ・校務分掌ごとの会議や教育委員会主催の研修などで、出張が多い。自習時間を減らすために、授業変更を繰り返している

会議等との両立が難しい

- ・放課後に会議などを行いにくく、教師間の意思疎通が難しくなっている

その他

- ・選択教科の縮減に伴い、教師間の持ち時数の不均衡が生まれている
- ・時間割を頻繁に変える必要があるが、非常勤講師がいるため変更が難しい
- ・3年生の場合、進路指導や入試、卒業期の関係により、授業可能日数が少ない
- ・教科間で時数の取り合いになっている

対応策

時数を確保し、生徒と向き合う時間を生み出すために

授業日数を増やす

- ・長期休業日の短縮、自治体や学校独自の祝日を休業日としない
- ・学期制の変更
- ・土曜日に授業を行い、振り替え授業を行わない

授業時数を増やす

- ・過当たりコマ数の増加、帯時間の活用
- ・行事の更なる精選
- ・他教科・領域等との重複部の見直し
- ・短縮授業の削減 ・給食日の増加
- ・変動制時間割による自習時間の削減
- ・授業進度の管理の徹底
- ・授業時間の変更(1コマ45分×1日7時間等)

校務を見直す

- ・会議の効率化や回数等の見直し
- ・校務分掌の見直し

具体的な取り組みは、次ページからの学校事例で紹介します

会議の運営方法を見直し 職員会議を1時間短縮

北海道札幌市立宮の森中学校

授業の質向上と生徒と向き合う時間の確保を目的として、校務の効率化を進める札幌市立宮の森中学校。新学習指導要領への対応で多忙化は一層進んでいるが、教師同士の連携が強化され、前向きに取り組む雰囲気生まれている。

学級・教員数減により 多忙化に拍車

札幌市立宮の森中学校は、札幌市内の閑静な住宅街にある。生徒は落ち着いて毎日をお過ごししており、学力面でも大きな課題は見られない。保護者は学校に対する支援に積極的で、教育への関心が高い土地柄である。

学校運営の面では、数年前から課題を抱えてきた。少子化による学級減・教員減の影響で、教師一人が受け持つ業務が増え、残業が常態化していた。

研究担当の鈴木康裕先生は、「以前は教師が手を差し伸べ合っていた業務でも、相互に

気配りや目配りすることが難しくなってきました。その結果、いつの間にか『大切なもの』がこぼれ落ちてしまっていることに気付いたのです」と振り返る。「大切なもの」は、23年前の開校当初にあふれていた「新しい学校をつくろう」という教職員の気概や、蓄積してきた学校の伝統や不文律、生徒指導の手法、教師同士の思いやりといったことだという。

「この数年間は、開校以来蓄積してきたノウハウを継承し、かつ、ICTの進展をはじめとする環境変化に対応するにはどうすればよいかを考える時期にありました」（鈴木先生）

2010（平成22）年度の教育課程（予定） *（ ）は年間授業時数

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語	道徳	特別活動	選択教科等	総合的な学習の時間	合計
1	4 (140)	3 (105)	4 (140)	3 (105)	1.3 (45)	1.3 (45)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	0	1.8 (65)	28 (980)
2	3 (105)	3 (105)	3 (105)	4 (140)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	1.4 (50)	2 (70)	28 (980)
3	3 (105)	2.4 (85)	4 (140)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	1 (35)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	2 (70)	28 (980)

- ・移行期間中は文部科学省の示す標準授業時数で運用する予定
- ・朝読書は授業時数に計上しない
- ・選択教科は時数の少ない教科を中心に学校選択とし、教師の持ち時間の平準化を図る。2年生は美術、3年生は音楽。特に社会、理科は授業時数増のためにも選択科目としかたが、国語、数学、英語と共に教師の持ち時間を増やせないため断念。代わりに、数学と英語でチームティーチングを実施

新課程対応

時数確保のひと工夫

そうした課題を抱えていたところに、学習指導要領の改訂が重なった。

同校は、生徒の体験学習の機会を確保し、保護者の期待に応えるために、行事を減らしてはいない。また、合唱大会向けの練習や朝読書の時間を授業時数に計上しない方針をとっている。このため、教師の多忙化が加速し、授業時数の確保も非常に難しい状況にある。時数増となる教科を中心に、担当教科による持ち時間の格差をいかに少なくするかも問題となっていた。

校務の効率化で教師同士が支え合う雰囲気

こうした状況を改善しようと同校が着目したのが、校務の効率化と校内環境の最適化だ。2006年度に「学校環境」「LAN・文書」「会議・学校評価」の三つの校務改善プロジェクトチームを立ち上げた。全教師がいずれかのチームに所属し、KJ法（*）などを使って問題点を洗い出し、解決策を検討した。検討は主に夏休みを利用。プロジェクトの運営に携わった吉川祐一先生は、「各テーマの課題解決だけでなく、教師間のコミュニケーションの活性化や、支え合う人間関係づくりもねらいの一つでした。皆が日頃から何とかなしたいと思っていたテーマだったため、楽しんで取り組みました」と話す。

確実な手応えも感じられるようになった。検討の結果を受けて、文書管理や会議の運営方法の改善、職員室のレイアウト変更などを行い、業務の効率化が進んだ（P.6）。その結果、生徒に接する時間が増加。更に、教師間のコミュニケーションが活性化して人間関係が広がり、互いを理解し合い、支え合う雰囲気も生まれたという。

授業時数は依然としてぎりぎり確保できている状況だが、教師はあくまで前向きに取り組んでいる。教務担当の今井貴先生は、「移行期間中は、教師数と授業時数のバランスが崩れやすい時期で、確かに大変です。皆で協力し合える関係と態勢を整えて、乗り切れないかと思っています」と話す。



札幌市立宮の森中学校
教務担当、技術・家庭科担当
吉川 祐一 Yoshikawa Yuichi



札幌市立宮の森中学校
教務担当、理科担当
今井 貴 Imai Takashi



札幌市立宮の森中学校
研究担当、数学科担当
鈴木 康裕 Suzuki Yasuhiko

学校データ

○1986（昭和61）年開校。大倉山ジャンプ競技場近くの緑豊かな住宅街に位置する。「自ら立ち ともに生きることを学び 明日を志す生徒」を教育目標に掲げる。職員室に文書カウンターやコミュニティスペースを設ける等、斬新な取り組みを続けている。



校長◎日下部憲一先生 生徒数◎349人

学級数◎12学級（1年生4、2年生3、3年生3、特別支援学級2）

教職員数◎校長1人、教頭1人、教諭22人、講師0人、職員等5人

所在地◎〒064-0951 北海道札幌市中央区宮の森1条16丁目5-1

TEL◎011-612-1147

URL◎<http://www.miyanomori-j.sapporo-c.ed.jp/>

2009（平成21）年度の時間割 1年1組の例

	月	火	水	木	金	
	8:40 - 8:50	朝読書				
	8:50 - 8:55	学活				
1	9:00 - 9:50	社会	音楽	体育	数学	総合学習
2	10:00 - 10:50	数学	国語	英語	英語	
3	11:00 - 11:50	技家	理科の講演会	数学	理科	英語
4	12:00 - 12:50	英語		技家	社会	理科
	12:50 - 13:50	昼食・昼休み				
5	13:50 - 14:40	美術	数学	国語	音楽	社会
6	14:50 - 15:40	学活	—	—	国語	道徳
	15:45 - 15:55	学活（5校時までの日は14:45～14:55）				
	15:55 - 16:15	清掃（5校時までの日は14:55～15:15）				

毎週変更、1年を通して時数を調整。2時間続きの授業をつくることも可能。教師各人が校内LAN上の電子掲示板に予定を記入し、教務担当が集約する。自習時間はほぼゼロ

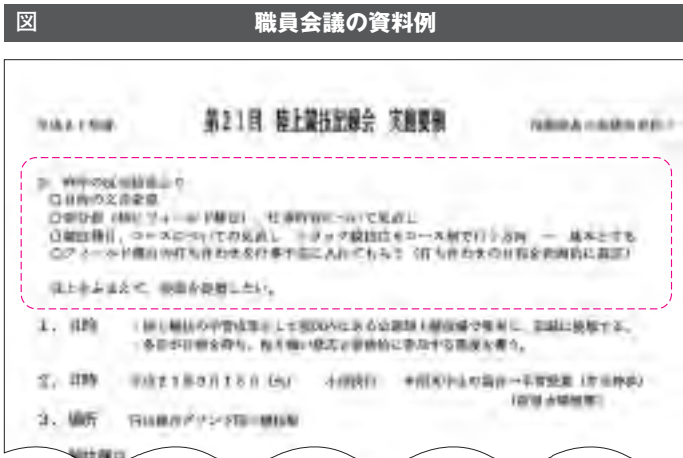
* あるテーマについての課題やアイデアを紙に書き出して整理する、情報収集や課題解決のための手法

1 会議の効率化で、生徒と接する時間を増やす

■ 定例会議の運営方法を変更

P.5で紹介したプロジェクトの目玉が、会議時間の短縮だ。検討の結果、職員会議、学年会、校務部会、研修部会の四つの定例会議の運営方法を変更した。もちろん、09年度も継続している。

◎ 会議の流れ——職員会議（年間10〜12回）を例に



職員会議の当日に配布された資料の一部。「0」番の項目は、会議の準備段階①と②を経て調整された提案事項で、出席者全員が既に把握している。そのため、会議開始と同時に要点を突いた議論が出来るようになった

① 議題を事前に揭示（会議の約1週間前まで）

次回の職員会議で提案したい議題がある教師は、通し番号「ゼロ番」から始まる資料を作成。ゼロ番には、何をどう変えたいのかなど、会議出席者に考えて欲しいポイントを端的に分かりやすく示しておく（図）。

資料は、職員室の専用掲示板に張り出す（写真1）。他の教師は、各自それを見て、付箋やマーカーペンなどで意見や疑問点などを掲示板に追加する。提案者が提示した案に対して、付箋で「事前投票」することもある。提案者は、あらかじめ出席者の意見や疑問点を把握して論点を絞り込むことが出来るため、会議時間が短縮される。出席者は、会議の内容を事前に把握しておくことで、会議当日は積極的な態度で臨むことが出来る。

② 意見を集約し議題を調整（会議の1週間前）

主任で構成される運営委員会で、①で出た意見を踏まえて会議当日の議題を絞り込む。

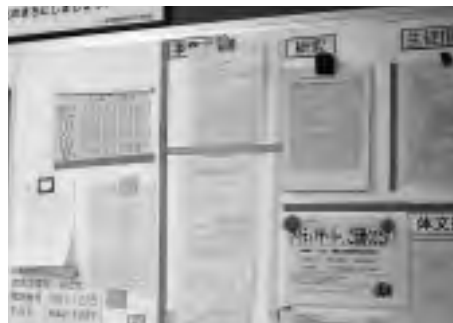


写真1 職員室の掲示板。校務分掌ごとに掲示スペースが決まっている。会議の議題は中央部に張り出される



写真2 職員会議は、会議室で顔を合わせて行う

議題が決まったら、提案者は必要に応じて付箋の内容を反映させるなど資料を練り直す。

③ 会議は職員室では行わない（会議当日）

会議は職員室ではなく、会議室の机を口の字型にして行う（写真2）。参加者同士の顔が見え、他業務の書類が置かれていない環境で行うことで、全員が会議に集中できる。

こうした工夫の結果、かつて2時間以上かかっていた職員会議が、今では1時間に短縮された。その結果、生徒と接する時間を大幅に増やすことが出来た。更に、会議時間の長さによって検討結果の質が左右されることも無くなったという。

時数確保のひと工夫

2

行事はカットせず、合唱練習は課外活動に

■生徒と保護者のため、学校行事は維持

同校は今後もこれまで通り行事を継続する方針を明確にした。もともと学校行事が盛んで、特に陸上競技記録会、クロスカントリー大会といった体育系の行事が他校よりも多い。保護者もこうした行事への思い入れが強く、沿道での誘導などの支援を惜しまない。生徒にとってかけがえのない思い出をつくり、たくましく生きる力を育むため、また保護者の期待に応え、信頼関係を維持するためにも、行事を削減すべきではないと判断した。

毎朝10分間の読書（教育課程外）では、図

書館の図書だけでなく、備品管理がより容易

な学級文庫の図書がよく使われる。学級文庫は、最低限の利用マナーを守れば、生徒が長期間自宅に持ち帰ることも許可。意図せず汚しても大目に見られるため、結果として「読書好き」を増やす重要な役割を担っている。

「昼休みに読書をする生徒が増えたことを学校便りなどで紹介すると、それを知った保護者が更に図書を寄贈するなどの支援をしてくれます。生徒の力を伸ばすためにも、保護者との良い関係を継続させることをとても重視しています」（吉川先生）

■合唱練習は授業時数に数えない

文化祭の準備として年間1、2コマ分行う合唱練習は、授業時数に数えていない。音楽の時間に本来指導すべき内容を教えられず、授業の質を落とす恐れがあると考えているからだ。「時数の確保を考えれば、行事を減らしたり授業時数に組み込んだりの方が楽です。でも、『数合わせ』ばかり気にして指導の質を落とすたくない。先生方は本校の教師としての使命感や保護者の支援や期待を受けて、必死に頑張っているのだと思います」と鈴木先生は話す。

3

教師に事前相談し、校務分掌を決定

■校務公平化の姿勢が教師の意欲を生む

教科による持ち時間の差から生じる教師の不公平感を解消するため、09年度は、校務分掌や担任の有無といった役割分担案を各教師に事前に公開し、相談する体制をつくった。

09年3月、次年度の体制について教務主任が一次案を個々の教師に相談した。特に負担が大きくなりそうな教師には、更にその前段階でも案を見せた。各教師の要望を踏まえ、教務主任が最終案を調整。管理職には適宜報告する。検討の主体は授業を持つ教師であり、最終結果は全教師で確認し合った。

こうした結果、09年度の体制に教師から不

満は一切出なかったという。今井先生は、「不均衡を完全に是正することは難しい。ただ、相談という過程を踏み教師が互いの負担を把握することで、校務に前向きに取り組み、協力し合う雰囲気が生まれました」と話す。

例えば、「総合的な学習の時間」（以下総合学習）を担当しない教師が「もっと生徒とかわりたい」と自主的にチームティーチング（以下TT）に加わることがあった。その教師にとって総合学習は、時間割には自分の名前が担当として書かれていても、正式な持ち

時間にはならない。総合学習におけるTTの

実施率は、09年の1学期だけで99・7%に上った。「予定外」のTTの実現で、授業の質の向上も期待出来る。

「どの先生も、生徒をもっと伸ばしたい、深くかかわりたいという気持ちで、時数外でも快く引き受けたり限られた時間を有効に使う方法を考えたりする原動力になっています。そうした努力が、生徒の成長や我々に見せる笑顔によって報われ、保護者の支援も得られ、教師が更に頑張る、という良い循環を生み出していると思います」（鈴木先生）

荒れのない学校づくりへ 「体験」を重視しつつ行事を精選

奈良県川西町・三宅町式下中学校組合立 式下中学校

奈良県磯城郡の川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校は、選択教科を活用して、体験活動と学力の定着を両立させる教育課程を組む。全面实施後の計画を見据えつつ、落ち着いて教師が指導し、生徒が学べる学校づくりを実現している。

体験的な学びの機会を 教育課程に意図的に盛り込む

奈良県北部の田園地帯に位置する式下中学校の生徒は、昔ながらの農村部の純朴さを持っている。かつてはいわゆる荒れの問題を抱えていたが、10年ほど前から落ち着きを取り戻し始め、特に6年前から生徒は目に見えて変わっていった。そのきっかけは、ノーベル化学賞を受賞した野依良治氏を招いた講演会だった。当時教頭を務めていた田中和臣校長は、次のように振り返る。

「講演会を開いたのは、小さな社会で生きている生徒の意識を外へ向けさせ、荒海を乗

り越えて泳いでいくエネルギーを与えたかったからです。同時に、講演会の運営を生徒に任せ、活躍の場にしようと考えました」

講演会の準備を行う生徒を募集したところ、100人近くの生徒が手を挙げた。講演会当日、普段は教師の話を姿勢を崩して聞いている生徒が、自然に背筋をぴんと伸ばして聞いていたという。

「生徒を変えるには、この手があつたかと衝撃を受けました。『教師が与えて、やらせる』教師主導型の指導ではなく、生徒に自主的に取り組みさせる活動を、教育課程に意図的に組み込むことが大切なのだと思付きました」

(田中校長)

2010(平成22)年度の教育課程(予定) * ()は年間授業時数

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	外国語	道徳	特別 活動	選択 教科等	総合的な 学習の 時間	合計
1	4 (140)	3 (105)	4 (140)	3 (105)	1.3 (45)	1.3 (45)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	0.4 (15)	1.5 (50)	28 (980)
2	3 (105)	3 (105)	3 (105)	4 (140)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	1.4 (50)	2 (70)	28 (980)
3	3 (105)	2.4 (85)	4 (140)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	1 (35)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	2 (70)	28 (980)

- ・移行期間中は文部科学省の示す標準授業時数で運用する予定
- ・1年生の朝読書は、レポートを作成・提出させることで「総合的な学習の時間」に計上
- ・選択教科等は、3種類の生徒選択と1種類の学校選択を設置(詳細はP.10)
- ・1年生の数学・英語、2年生の理科は、少人数制授業を実施。理科は第1分野と第2分野を1か月単位で入れ替えている

新課程対応

時数確保のひと工夫

生徒も教師も目標に向かって安心して努力でき、二度と荒れの起きない学校にするために、生徒が主体的に取り組める体験活動を重視する——これは、同校の教育課程編成方針の土台となっている。

最も象徴的な例は、選択教科の積極的な活用だ。箒こや合気道など心や体を動かす活動や、ものづくり、近隣の幼稚園への訪問など、体験的な学びの機会を保障している。3年後の全面実施時に選択教科は無くなるが、それまでに蓄積したノウハウや資産を生かし、各教科の単元に内容を移して指導することは十分可能だという（P.10）。

同様の観点から、部活動や行事も重視する。行事は、時数確保の観点から精選せざるを得ない状況だが、単に減らすようなことはしない。入学直後の集団学習の日は逆に増やすなど、近年の生徒の様子を見て臨機応変に対応している（P.11）。

新課程の全面实施で問われるのは教師の「創造力」

田中校長は、目指す学校像を教師に伝え、それを教師全員が生徒に対して行動で示すことを重視している。

「中学校では学年単位で物事を考える意識が強いのですが、これには問題点があります。例えば、廊下で擦れ違った生徒が靴のかかとを踏んでいても、他学年の生徒だと教師は注

意しにくい。しかし、学年の壁を越えて指導に当たらないと、やがて学校は疲弊してしまいます。教師が一丸となっている姿は生徒にも伝わり、生徒が規律正しい行動をとるようになります」（田中校長）

もう一つ、田中校長が強く期待しているのが教師一人ひとりの「創造力」だ。

「日々変化する社会の中で生徒にたくましく生きる力を身に付けさせるためには、教師自身の創造力が不可欠です。常にゼロベースで物事を考え、生徒一人ひとりに対応出来るだけの引き出しを持たないと、学級経営も学年経営も出来ません。管理職としてそうした人材をたくさん育てたいと考えています」と、田中校長は思いを語る。

学校が落ち着きを取り戻すに従い、学力は向上してきた。基礎・基本の定着などの課題はあるものの、今では学力テストで全国平均や県の平均を上回るという。学力だけでなく、生徒の姿勢にも変化が見られる。以前は「人気投票」の色合いが強かった生徒会役員の選出選挙も、学校をより良くし、講演会などさまざまな行事を成功させるためにと、立候補する側も選ぶ側も真剣に取り組むようになったという。



川西町・三宅町式下中学校組合立
式下中学校校長
田中和臣 Tanaka Kazuomi

学校データ

◎1949（昭和24）年開校。校舎は川西町、校庭は三宅町と、校地がまたがる両町唯一の中学校。校区には観世流能楽の発祥地があり、伝統文化の教育に力を入れる。部活動を重視し、特に陸上競技部は全国レベル。



校長◎田中和臣先生 生徒数◎402人
学級数◎14学級（1年生4、2年生4、3年生4、特別支援学級2）
教職員数◎校長1人、教頭1人、教諭22人、講師6人、職員等3人
所在地◎〒636-0202 奈良県磯城郡川西町結崎1866
TEL◎0745-44-0039
URL◎http://www.shikige-jh.ed.jp/

2009（平成21）年度の時間割 2年1組の例

	月	火	水	木	金	
	8:25- 8:30	朝の学活				
	8:30- 8:40	早朝学習				
1	8:50- 9:40	英語	数学	社会	総合	学活
2	9:50-10:40	美術	国語	数学	社会	英語
3	10:50-11:40	技術	理科	国語	音楽	選択A
4	11:50-12:40			理科	国語	理科
	12:40-13:25	給食				
	13:30-13:40	清掃	—	清掃	—	清掃
5	13:50-14:40	保体	社会	総合	英語	道徳
(6)	14:30-15:20)	—	保体	—	数学	—
	14:50-15:00	終学活（6校時までの日は15:30～15:40）				

時程は月水金の場合。火木は清掃が無く、5時間目が13:30～、終学活は15:30～となる。朝会がある日は早朝学習は無い。時間割は毎週変更。家庭科は別期間にまとめて取りする

1

選択教科に、体験活動と基礎学力定着を組み込む

■ 選択教科で教科学習に無い体験活動を

同校は、教科に関連した体験学習や異年齢交流の機会を選択教科に取り入れている(図)。一つは3年生の学校選択で行う技術・家庭

科。08年度までは「総合的な学習の時間」(以

下、総合学習)で行っていたが、09年度は総合学習の時数が減ったため、学校選択とした。技術科ではものづくりを、家庭科では保育を体験。家庭科では生徒が各自絵本を作り、地域の幼稚園を訪問し読み聞かせなどを行う。

もう一つは、2年生の選択Aだ。授

業時数の多い国・数・英を除く6教科で開設。前・後期で異なる講座を希望制で選択する。いずれも必修の授業とは別扱いとし、筆や合気道など体験型の独自プログラムを用意した。

12年度には選択教科が無くなるが、

これまでに蓄積したノウハウを他教科で生かすことは十分可能だと考えている。例えば、毎回外部講師を招いて行

い、男女を問わず人気の高い箏の授業。新学習指導要領で示された伝統音楽の重視にもつながるため、全面实施後も

音楽の単元に組み込む予定だ。更に、「総合学習として捉えることも可能です。

2月には外部講師の人脈を生かして箏や三味線、尺八の演奏を聴き、その後

ワークショップ形式でそれらの楽器を体験するコンサートを開催します。こ

れは企画次第で学習をもっと深められますし、外部の方と交流する機会はキャリア教育にも

なります」(田中校長)と説明する。

■ 選択と少人数制で基礎・基本の定着を図る

学力定着の手段にも、選択教科を活用する。

3年生の選択Bは、入試を意識し、基礎・

基本の徹底を目的とした習熟度別の授業だ。

国・数・英それぞれに標準コース・発展コー

スを用意し、生徒自身に2教科分のコースを

選ばせる。選んだコースが合わない途中で

分かってても、1年間は変更できない。田中校

長は、「人生には何度も選択をする機会があり

ますが、すべての選択が成功するわけでは

ありません。自分で選んだ道に責任を持って

欲しいと考えるからです」と説明する。

選択Bは、1・2年生担当の3教科の教師

も授業を受け持つ。学年を越え、教師全体で

生徒を見ていくと共に、教師間の業務平準化

を図るためだ。

図 選択教科の種類と年間授業時数(2009年度～)

	生徒選択			学校選択	時数合計(予定も含む)		
	選択A (課題別)	選択B (習熟度別)	選択C (補充学習)		2009 (平成21) 年度	2010 (平成22) 年度	2011 (平成23) 年度
	・社・理・音・美・ 保体・技家(6 教科、6講座) のうち2講座 ・希望制 ・前期と後期で 異なる教科を 選択	・国・数・英のう ち2教科 ・各教科で標準 コースと発展コ ースを設置 ・希望制(途中 変更不可)	・国・社・数・理・ 英・総合 ・朝の10分間を モジュール扱い ・1年生:週3日は 国・数・英のど れか。週単位 で教科をローテ ーション。週2 日は朝読書とし て総合に計上 ・2・3年生:5教 科を週単位で ローテーション	・技術・家庭 (技術:もの づくり、家庭: 保育をそれ ぞれ週0.5コ マ)			
1年生			15		15		
2年生	35		35		70	50	
3年生		70	35	35	140	105	70
2010 (平成22) 年度以降 の予定	2009年度と同 様	2010年度は35 時間、2011年 度はなし	2010年度は2年 生が年15時間に 、2011年度は、20 10年度と同様	2012年度は 年5時間に	新課程の全面实施後については検討中		

時数確保のひと工夫

2

給食日の増加や行事の精選で時数確保

■自校式給食を生かし、時間割を柔軟に変更

授業時数の確保のため、給食日数を増やしている。自治体が定める年間の給食日数の上限は160日。同校の場合、かつては150日ほどだった。09年度は、各学期の始業式直後の期間を給食日に変更するなどして、年間156日を実施する予定だ。例えば2学期の場合、始業式のある9月1日だけが午前のみで、2日からは給食を始め、午後にも授業を行う。年間授業時数を約12時間確保できる。

また、年数回は給食の時間を3時間目後に前倒しするなど、自校方式の利点を生かし、

柔軟に時間割を変更している。

■行事の精選はメリハリをつける

行事は全体的に減らさざるを得ない傾向にある。同校は毎年1月初旬までに、その年度の行事を振り返り、次年度の年間計画を吟味する。「新年度になってからは、異動する教師もいるため、前年度の課題が十分に反映されない」（田中校長）からだ。これまでも、修学旅行がマンネリ化していると判断すれば訪問先を変更するなど、教師の企画力を生かして改善を続けてきた。

09年10月時点で、10年度以降の行事は既に

3

時間割を毎週作成し、自習をなくす

■時間割作成ソフトを使い、最後は手作業

同校では週ごとに時間割を作成している。磯城郡内には中学校が3校しかなく、どうしても郡の世話役をする頻度が高くなり、教師の出張が多いからだ。

まず、教科担任が2週間先の予定をリクエスト表に記入して教務担当に提出する。教務主任はそれを基に時間割を作成し、次の1週間分の時間割を出力、各教室に張り出す。直の生徒が確認をして掲示用の時間割を入れ替える。以前は翌週の時間割をプリントして生徒全員に配布していたが、労力がかかるた

め現在の方式にした。問題は全く無いという。

同校にとって必要不可欠なのは、時間割作成ソフトだ。毎週、合計300コマ以上（27コマ×12学級分）の時間割をすべて手作業で組むのは困難なため、数年前から市販のソフトを活用。行事や出張が多い週は約70%、そうでない週は約90%のコマを自動的に作成出来るという。例えば、入力した条件だと理科室が重複してしまう場合などはエラーが表示されるため、それらをパソコンの画面上で調整する。ある教師に急な出張が入り、授業を入れ替える必要がある場合も同様だ。最終的

検討済みだ。例えば2年生の校外学習は、琵琶湖でのカヌー体験を1泊2日から日帰りに変更することで、授業時数を増やす。逆に、充実を図る行事もある。1年生の入学直後に実施する日帰り校外学習は、1泊2日の宿泊学習にする予定だ。

「最近の生徒を見て、出来るだけ早い時期に生徒同士のぶつかり合いを経験させたいと考えました。互いを理解し合えるようになり、学級運営がスムーズになるからです。何を減らし何を残すかは、目の前の生徒たちの状況で常に変える必要があるのです」（田中校長）

な微調整も含めて、1週間分を2、3時間程度で作成している。課題は、現在使用しているソフトには2人の教師間で授業を入れ替える機能はあるが、実際に行うことが多い3人の授業を入れ換える機能がないことだという。同校ではこのソフトと併せて、各教科・クラスの授業進度をエクセルで管理。更に、例えば体育大会前後に台風が接近しているとわかれば、3パターンの時間割を作成して備えるなど、きめ細かな時間割管理を行っている。その結果、自習は1クラスにつき年に1回程度に抑えられている。

朝の「トレーニング学習」で 学力向上と業務平準化を両立

長崎県大村市立郡中学校

新学習指導要領の全面实施を見据えて、朝学習の内容を整理・系統化している大村市立郡中学校。
基礎・基本の定着を主眼に置きながら、
会議の効率化や業務の平準化といった教師の負担にも配慮した改善を続けている。

基礎の定着を目指す朝学習を 教育課程の柱の一つに

大村市立郡中学校には素直でのんびりした
気質の生徒が多く、広々とした校舎で落ち着いた
いた学校生活を送っている。行事や部活動に
意欲的に取り組む一方、自分の考えを表現す
る力や体験活動の経験がやや不足気味である。
学習面では、基礎学力の定着と、集中して徹
底的にやり抜く力が弱い点が課題だ。教務主
任の刈山弘全先生は、次のように話す。

「なかには、1年生の基礎的な内容でつま
ずいたまま3年生に進級し、授業が分からず
自信をなくしている生徒も相当数います。そ

うした生徒にも授業を理解して欲しいため、
3年生では1年生の内容に戻って説明し直す
ことに時間を割いているのが現状です。しか
し本当は、新学習指導要領で強調されている
『活用』する力など、本来教えるべき内容に
十分な時間を使えるようにしなければなりま
せん。1年生から基礎・基本を身に付けさせ
る必要性を強く感じていました」

こうした状況を踏まえ、同校では基礎・基
本の定着に主眼を置いた教育課程を編成して
いる。同時に、自分に自信を持って積極的に
取り組む姿勢や、短時間でも静かに学習に向
かう集中力の育成にも力を注ぐ。

そのための新たな試みとして、新学習指導

2010（平成22）年度の教育課程（予定） *（ ）は年間授業時数

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	外国語	道徳	特別 活動	選択 教科等	総合的な 学習の 時間	合計
1	4 (140)	3 (105)	4 (140)	3 (105)	1.3 (45)	1.3 (45)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	0.4 (15)	1.4 (50)	28 (980)
2	3 (105)	3 (105)	3 (105)	4 (140)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	1.4 (50)	2 (70)	28 (980)
3	3 (105)	2.4 (85)	4 (140)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	2.6 (90)	1 (35)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	2 (70)	28 (980)

- ・移行期間中は文部科学省の示す標準授業時数で運用する予定
- ・「総合的な学習の時間」は全面实施以降の時数とする
- ・基礎・基本定着のため、朝の帯時間に「トレーニング学習」を実施。1年生は必修数学の1コマ分、2・3年生は学校選択教科（数学、国語、英語）の時間に計上する
- ・伝統行事である合唱祭の取り組みを含めた合唱指導を行うため、全学年で15～50時間の学校選択教科（音楽）を開設

新課程対応

時数確保のひと工夫

要領の全面実施を視野に入れつつ2009年度から始めたのが、全学年で毎朝10分間の帯時間を利用して行う「トレーニング学習」だ（P.14）。

教師の負担平準化と会議の効率化を模索

移行期間中は、教師一人ひとりの負担増を抑えながら、担当教科によって異なる業務量を平準化することを重視している。全体として、年間授業時数を980時間内に収めるようにし、行事も精選（P.15）している。

選択教科の時数は上限まで確保し、時数増となる教科を開設。その一部は教師全員で担当する。これに伴い、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の時数は下限の値をとり、内容を絞り込んだ（P.15）。

朝のトレーニング学習は教科として時数に計上。学級担任を始め、各学年団の教師全員で生徒を見ることが、教師の業務量を平準化する役割も果たしている。

朝のトレーニング学習導入による時間割の変更に伴い、教師同士のコミュニケーションの方法も試行錯誤中だ。学年内の連絡は、09年度から職員室ではなく各学年の階の廊下で行っている。全担任が集まるトレーニング学習の前後の時間を利用しているのだ。

全体職員連絡会は、朝に時間を確保できなくなったため、月曜と木曜の夕方に各20分で



大村市立郡中学校
戸田朋彦 Tomohiko Toda
研究主任、数学科担当、1学年担任



大村市立郡中学校
刈山弘全 Hiromasa Kariyama
教務主任、数学科担当

行うことにした。ただ、夕方は生徒指導などに対応する教師もいるため、教師全員が集まることが難しい。教師から朝の職員連絡会復活の要望が強かったこともあり、09年度の後期から木曜は夕方に残し、月曜だけ朝に戻すなど、現状に合わせながら改善を続けている。時間が長引きがちな職員会議は、回数を増やし、1回を1時間程度に短縮することを目指している。更に、既設の学年別連絡用ホワイトボードに加えて、全教師向けのものを新たに設置した。口頭での連絡にかかる時間を減らすためだ。今後も教師間の連絡方法を見直し、効率化していく考えだ。

基礎・基本の定着のために学習に集中して徹底的に取り組む時間と共に、学級全体で行事に打ち込む時間も重視する。指導のねらいに応じて「静と動」のめりはりを明確にした教育課程と、教師間のコミュニケーションを確保するために、会議の在り方を柔軟に改善している点が、同校の取り組みの特徴といえる。

学校データ

○1947（昭和22）年開校。校訓は「自主・自律・創造・連帯」。2004年度から3年間、文部科学省の指定を受け、特別支援教育の校内支援体制や地域支援システムの構築、教育課程の編成などを研究した。



校長◎一瀬明則先生 生徒数◎552人

学級数◎17学級（1年生6、2年生5、3年生5、特別支援学級1）

教職員数◎校長1人、教頭1人、教諭29人、講師4人、職員等12人

所在地◎〒856-0809 長崎県大村市沖田町69

TEL◎0957-55-8318

URL◎http://www.city.omura.nagasaki.jp/school/info/prev.asp?fol_id=1570

2009（平成21）年度の時間割 3年1組（Ⅱ期7月13日～12月11日）の例

	月	火	水	木	金	
	8:15- 8:25	朝読書				
	8:25- 8:35	トレーニング学習				
	8:35- 8:45	学級会				
1	8:55- 9:45	数学	理科	英語	音楽	選択音楽
2	9:55-10:45	理科	英語	社会	社会	国語
3	10:55-11:45	英語	保体	数学	国語	社会
4	11:55-12:45	技家		美術	数学	理科
	12:45-13:40	昼食・昼休み				
5	13:40-14:30	国語	道徳	保体	学活	選択数学
6	14:40-15:30	A	—	総合	—	総合
	15:35-15:50	清掃（5校時までの日は14:35～14:50）				
	15:55-16:05	学級会（5校時までの日は14:55～15:05）				

時間割は年3回変更している。月曜6校時の「A」は、全校集会や行事の準備、時数が不足しそうな授業を入れる。月曜は8:40～8:50に職員朝会を行うため、学級会と朝読書の時間を入れ替える。トレーニング学習の導入に伴い、朝読書と中休みを各5分短縮し、朝の学級会と1校時の間を5分延長。昨年度までの終了時刻より計5分遅くなる

1 教育課程への移行を視野に、朝の帯時間を活用

■技能を身に付ける学習で達成感を

朝のトレーニング学習(写真)は、学年ごとに教育課程上での位置付けが異なり、それに応じて内容も違う。1年生の場合、週1コマ増えた数学に計上。計算練習のプリントを配り、1、2週間、同じ問題に繰り返し取り組ませ、毎週金曜日に小テストを実施。教科担任と学級担任で結果を共有する(図)。上達する経験を積ませ、生徒に自信を付けさせるのがねらいで、教師も「出来たことを褒める」よう心掛ける。数学科担当の戸田朋彦先生は、数学は帯時間の学習に適した教科だと話す。



写真 1年生の朝のトレーニング学習の様子。学級担任に加えて、担任を持たない教師も教室を巡回して指導する

図 1年生数学科トレーニングの記録

学年	科目	実施回数	平均正答率	最高正答率	最低正答率
1年生	数学	15	85.3	95.0	75.0
2年生	英語	15	80.0	90.0	70.0
3年生	英語	15	85.0	95.0	75.0
4年生	英語	15	80.0	90.0	70.0
5年生	英語	15	85.0	95.0	75.0
6年生	英語	15	80.0	90.0	70.0

教科担当者がトレーニングの一環として行う小テストの結果を集約し、コメントや指導上のアドバイスと共に学級担任に報告する



記録シートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式(データを入れると正答率等が自動表示)でダウンロードできます。
<http://view21.jp/c9311/>

「1日10分、全員で負担増を分かち合う」ワークシェアリングです」(刈山先生)。
また、数学教師1人で1学年全学級を担当するための方策でもある。1学年6学級の同校では、週4コマになると1人の数学科教師で全学級を見られないが、

「知識の獲得より、技能を身に付ける方が達成感があり、意欲が高まると考えました。基礎が未定着の生徒は正答率アップ、基礎が出来た生徒は速度アップと学力に合わせて目標を変えやすいのも利点です。当初の予想以上に生徒の計算力が付いています」
■教師全員で担当し、負担を平準化する

朝のトレーニング学習は、数学教師の負担を分散させるねらいもある。この時間は、学級担任に加えて、学年主任ら学級担任を持たない教師が全員、教室を巡回する。「1日10分、全員で負担増を分かち合う」ワークシェアリングです」(刈山先生)。

週3コマまでなら可能だ。1人で担当すれば、複数で見える場合に必要な会議の手間を省ける。課題は、本来週4コマの数学を週3コマで進めなければならず、年間指導計画より進度が遅れ気味なことだ。「09年度はより効果的な方策を模索する段階。課題を洗い出し改善していきます」と戸田先生は話す。

他学年も基本は同じ。2年生が選択教科の国語と数学、3年生は同じく国語と英語だ。全面实施後の選択教科の廃止に伴い、教育課程へ組み込むか、教育課程外の自習扱いとするかは検討中だ。教育課程に組み込む場合は、一定期間ごとに特定教科の朝のトレーニング学習を行い、通常の授業の時数と合算する方法が考えられる。例えば、数学は4、5

月を朝のトレーニング学習、6月以降は通常授業のみ、英語は4、5月と8月以降が通常授業、6、7月はトレーニング学習を加える、といった具合だ。難点は、授業時数の計算が煩雑になることだという。
「現時点で、どちらが良いかを判断するのは早計。いずれにしても、全面实施までに朝の帯時間は全教師で指導するという雰囲気が高めることが大切です」(刈山先生)

時数確保のひと工夫

2

伝統ある合唱祭を残し、他の行事は精選

■合唱祭の練習を選択音楽で行う

合唱祭は、生徒一人ひとりが積極的に参加し、学級がまとまり活性化する機会として、大村市全体で数十年、力を入れてきたものであり、今後も重視する。

移行期間中は、これまで特活などで確保していた合唱練習の時間を、学校選択の音楽として設定。1年生で年15時間、2、3年生はそれぞれ年50時間確保した。各学年とも15時間分は、2月の合唱祭の直前練習と当日でまとめ取りする。毎日1時間行う直前練習が、2週間で計10時間分、合唱祭当日が5時間分

だ。直前練習は主に生徒主体の練習で、学年団の全教師が見る。2、3年生の残り年35時間分は、通年で週1回の授業を行い、音楽科の教師が指導する。

10年度以降は、選択教科の授業時数削減に伴って選択教科としての音楽を減らし、全面实施はゼロにせざるを得ない。

「合唱祭の練習は放課後の課外活動へと移行する予定。会議などで指導出来ない場合や、勤務終了時間の関係から最大20分しか指導出来ないことが課題です」（刈山先生）

■文化祭は完全廃止、体育祭は内容を見直す

合唱祭以外の行事は、授業時数確保のために精選した。例えば、文化祭は完全に廃止し、それを簡略化した学習発表会のようなスタイルでも行っていない。また、体育祭は08年度から3学年の縦割り集団による対抗戦を導入。3年生が応援練習などで下級生を指導する経験を通してリーダーシップを培うと共に、異学年交流によって校内を活性化させている。

毎週月曜の6時間目には、全学年で「A」という学校裁量の時間枠を設定した。行事の準備や課外活動、全校集会、委員会活動、欠時となった授業などに充てている。

3

時数減に合わせて総合学習のテーマを絞る

■多単元方式で探究サイクルを短く設定

総合学習の時数は、3年後の全面実施に備えて下限の値（1年生50時間、2、3年生70時間）とした。ただ、時数が減っても授業の質を落とさないように、内容を精選した。

同校の総合学習は「生き方を学ぶ」「学ぶ方を学ぶ」の二本立て。全学年で平和・人権の調べ学習を行うほか、1年生は表現スキルの学習や郷土調査など、2年生は職場体験や進路計画など、3年生は高校調べや自分史の作成と、多数のテーマを単元形式で用意する。09年度は授業時数削減に対応し必要性の高い

ものに絞った。単元形式は以前から行っていたため、大規模な再編の必要はなかった。

「通年で一つのテーマに取り組む場合、課題設定の仕方が1年間の学習活動に影響を及ぼすため、年度当初の細やかな指導が必要だ。しかし現実には、生徒全員に課題意識を持たせ、設定させるのは難しい。課題設定後の追究期間に中だるみもあります。本校の生徒の現状からすると、1テーマの追究期間を短くして、課題設定、追究、まとめという一連の流れを何回も繰り返した方が、追究する力が身に付くと考えています」（刈山先生）

■数学と体育は学校選択で先行実施

時数増となる教科のうち、3年生の数学と体育は、いずれも学校選択として先取りした。数学は週1コマ、体育は0・4コマ（年20時間）を使い、増加する指導内容を盛り込む。

「08年度の選択教科で保健体育の人氣が高く、全国的に中学生の体力が伸び悩んでいたことが、学校選択で保健体育を設けた理由です。本当は、英語も時数増が少人数制授業としかったのですが、英語教師の持ち時間数を考え、断念。今後も状況に応じて柔軟に対応していきたいと思えます」（刈山先生）

週30コマを「ゆるく」運用 行事等に充て学びの土台を築く

神奈川県横浜市立中山中学校

新学習指導要領の全面实施を見据え、実質週30コマを確保している横浜市立中山中学校。入学式の翌日から教育相談を行うなど、生徒と向き合う時間を最優先する。管理職の率先垂範と教師間のこまやかなコミュニケーションが、「多忙」ながらも「徒労」にならない教育活動を支えている。

年間計画でまず考えるのは 相談活動の日程

横浜市立中山中学校が位置する地域は、市の中心部まで電車で15分程度の場所でありながら、静かで緑豊かな環境にある。古くからの住民が多いこともあり、学校に対して協力的な土地柄で、地域と学校との交流の機会となる行事も盛んだ。生徒は明るく都会的で人懐こく、おおむね落ち着いた学校生活を送り、学力も安定している。

教育課程の編成と年間の行事計画で重視するのは、相談活動の充実だ。

諏訪部真史校長は、「年間計画は教育相談

や個人面談など、生徒と話し合う行事の日程をまず確保してから、全体を調整しています」と説明する。これは、学校全体の取り組み目標でもある「指導の個別化」の具体策の一つだ。今のところ、生徒指導上深刻な問題が起きていないわけではない。生徒の学力や家庭環境の多様化が進む中、個への対応を学校全体で意識的に取り組む必要があると考えているからだ。

こまやかな指導の一環として、1年生の数学と英語は、すべての授業を少人数制で行う。

野口みか子副校長は、「教師の持ち時間数は増えますが、多人数の授業では十分な理解が難しい生徒が増えるよりも、日々の少人数

2009(平成21)年度の教育課程 *()は年間授業時数

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	外国語	道徳	特別 活動	選択 教科等	総合的な 学習の 時間	合計
1	4 (140)	3 (105)	4 (140)	3 (105)	1.5 (50)	1.5 (50)	3 (105)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	0	2 (70)	29 (1015)
2	3 (105)	3 (105)	3 (105)	4 (140)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	2 (70)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	2 (70)	2 (70)	29 (1015)
3	3 (105)	3 (105)	3 (105)	3 (105)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	1 (35)	4 (140)	1 (35)	1 (35)	3 (105)	2 (70)	29 (1015)

- 各学年とも週29コマとなっているが、朝学習の時間を含めて、「総合的な学習の時間」を中心に実質週30コマを確保
- 3年生は、受験を視野に入れた学習習慣の定着と時数確保のため、9月からさらに1時間増加
- 選択教科は、2年生では国語・英語(各35時間)、3年生では社会・数学・理科(各35時間)としている
- 1年生は数学と英語で少人数制授業を実施(09年度実績。10年度は未定)

新課程対応

時数確保のひと工夫

制授業で丁寧に指導することによって、より多くの生徒が授業内容の理解を深められる良さがありません。また、生徒一人ひとりと接する密度が濃い授業となるので、互いの信頼関係が深まり、多くの教師が充実感を味わっています」と話す。

週30コマの激務を支える
「成熟した教師集団」

2009年度からは、週29コマに朝の帯時間を加えた実質週30コマで運用している。ねらいは二つある。一つは、新教育課程の全面实施を見据えて、教師・生徒共に時数が増えた状態での学校生活に慣れておくこと。もう一つは、各教科では指導しにくいが大切な学びの土台となる力を育成することだ。増加した時数は「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の扱いとし、学校行事とその準備等に充てている。

指導の個別化を進め、時数を増やせば、当然、教師の負担が増える。また、教務担当者にとっては時間割の調整もますます煩雑になる。それでも、同校には授業にも校務にも前向きに取り組む雰囲気がある。教師の意欲が維持されている理由として、諏訪部校長は次のように語る。

「すべての教師の役割分担が適切になされていることでしょうか。校長の役割は、学校の目指す姿を明確にして先生方に示すことで

す。単に文書や口頭で伝えるだけでなく、自らが率先垂範する。ただし、いつも校長が前に出るのではなく、校内のリーダーを見て上手に頼り、先生方の意思疎通と工夫で問題解決できる雰囲気をつくるのが大切です。先生方の動きを見て任せるものは任せ、もし何かあれば自分が前に出る。その積み重ねによって学校全体の目的意識が共有されると共に、各自がどう動けばよいかを考えて行動する『成熟した教師集団』が出来ていくのではないのでしょうか。日々飛び回っている先生方には本当に感謝しています」



横濱市立中山中学校
数学科担当
畔上兼一 Azegami Kenichi



横濱市立中山中学校
教務主任、英語科担当
畑和夫 Hata Kazuo



横濱市立中山中学校副校長
野口みか子 Noguchi Mikako



横濱市立中山中学校校長
諏訪部真史 Swabe Masafumi

学校データ

◎1947(昭和22)年開校。県立四季の森公園の一角に位置し、豊かな自然に囲まれている。横濱市の小中一貫教育の実践推進校として、三つの小学校と連携を図った研究を進め、教師は学区内の全小学校への出張授業を行う。



校長◎諏訪部真史先生 生徒数◎708人
学級数◎22学級(1年生7、2年生6、3年生6、個別支援学級3)
教職員数◎校長1人、副校長1人、教諭36人、講師6人、職員等5人
所在地◎〒226-0013 神奈川県横浜市緑区寺山町653-21
TEL◎045-931-2108
URL◎http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/jhs/nakayama/

2009(平成21)年度の時間割 1年1組の例

	月	火	水	木	金	
	8:40 - 8:45	学活				
	8:45 - 8:55	朝読書				
1	9:00 - 9:50	道徳	英語	社会	数学	技術
2	10:00 - 10:50	保体	国語	保体	理科	保体
3	11:00 - 11:50	数学	社会	国語	音楽	英語
4	12:00 - 12:50	理科	理科	数学	国語	国語
	12:55 - 13:10	昼食				
5	13:35 - 14:25	音・美	数学	技術	英語	学活
6	14:35 - 15:25	社会	総合		美術	
	15:30 - 15:40	学活(5校時までの日は14:30~14:40)				
	15:40 - 15:55	清掃(5校時までの日は14:40~14:55)				

「総合的な学習の時間」は、上記時間以外の特定時間に週1コマ分相当をまとめて取りする。家庭科は後期に履修。以前はスライド制だったが、現在は固定制に変更

1

相談活動を最優先に年間計画をつくる

■年4回の面談、家庭訪問、教育相談を確保

同校は面談活動を大切にし、生徒との二者面談は長期休暇明けの4、9月、保護者を交えた三者面談は長期休暇前の7、12月と、年間4回の機会を確保している。更に、4月は家庭訪問を行い、3年生には進路相談が加わる。諏訪部校長は「中学生の発達段階を考えると、普段の見取りや声掛けとは別に、時間と場所を確保して落ち着いた雰囲気です話し合う機会が必要」と面談活動の意義を説明する。例えば4月の場合、入学式・始業式の翌日

から生徒と担任による「教育相談」の枠を4コマ分確保する。生徒と教師の初顔合わせと同時に、新年度の早い段階で生徒が抱える不安を把握することがねらいだ。教育相談の翌週には、5日間の家庭訪問を行う。そのうち

1日は訪問が難しい保護者に学校に来てもらう日に充てる。一時期は廃止を検討したが、保護者と直接顔を合わせ、同時に地域を知るための貴重な機会として継続している。

4月は他に、年度初めに欠かせない8種類9回の会議、離任式や歓送迎会などの行事

が重なるが、年間計画を立てる際も、まず教育相談の日程を確保した上で、他の行事や会議を上乘せしていくという。

■部活動指導のため5つの会議を隔月に

全教師を対象とした6つの会議（職員会議、学年会、総務部会など）のうち、学年会以外は隔月開催とした。野口副校長は「本当ほどの会議も毎月行いたいのです。しかし、会議の時間は大抵部活動の時間と重なるため、そこで生徒とかかわる機会を失うのが惜しい。苦肉の策です」と胸の内を明かす。

2

総合学習を中心に、時数枠を多めに確保

■「ゆるい運用」で3年後に向けた準備を

09年度は週29コマとし、朝の帯時間を加え、実質30コマの枠を確保。増加分は総合学習に充てた。そのねらいを諏訪部校長はこう話す。

「一つは、時数という外枠に3年かけて生徒も教師も慣れるためです。教科の時数をいきなり増やすと生徒の心理的負担は大きく、教師の持ち時間数の点でも負荷が大きいです。もう一つは、教育の質の維持に対する配慮です。新教育課程では固定された教科中

心の内容になり、学校独自の週時程を組める枠が縮小されますが、標準時数だけでは足りない大切な教育活動もあります。行事の準備

や学級活動、読書などがその一例です。本校は30コマと多めの枠でそれらの時間を確保し、意図的に『ゆるい運用』をしながら、3年間で教科・領域の内容と併せて整理する予定です」

総合学習は、人権・福祉、伝統文化、キャリア教育などを柱に、事前・事後学習を含めた行事が中心だ。職場体験活動などはまとめ

取りするが、多めに確保した時数分は「もう少し時間をかけて指導したい」など、その時々学年からの要請で使う。教務主任の畑和夫先生は「本来は予め時数を配分できればよいのですが、現在は試行錯誤の段階。あと1、2年たてば見通しが立つと思います」と語る。

3年生では、9月からの授業時数を更に1時間増やした。部活動引退後、受験に向け学習習慣を身に付けさせると共に、受験などの関係で減りがちな授業時数を確保するためだ。

時数確保のひと工夫

3

1年生の数学・英語で全授業を少人数制に

■生徒の意欲につながるよう少人数制を実施
 いったんつまずくと取り返しにくく、差が
 つきやすい数学と英語は、1年生で少人数制
 授業を行っている。数学は週4コマ、英語は
 週3コマの全授業について、1クラスを単純
 に2分割して実施する。1年生は7学級ある
 ため、数学は56コマ分（4コマ×7クラス×
 2）、英語は42コマ分（3コマ×7クラス×
 2）となる。これを、それぞれ2人の教師を
 中心に他の教師が加わって受け持つ。

数学を担当する畔上兼一先生は、「生徒に
 は、学校生活全般を意欲的に過ごして欲しい

と思っています。そのために部活動などには有
 効ですが、部活動のためだけに学校に来るの
 ではなく、もっと大切な教科学習に対する意
 欲を持たせたい。よりこまやかな指導が出来
 生徒に『分かった』『もっと頑張りたい』と
 思わせることが出来る少人数制は、とても有
 効です。そうした生徒の反応を見て、私自身
 が教える楽しさを実感し、意欲のもとにもな
 っています」と語る。

■効果が感じられる少人数制は継続予定

数学と英語は、新教育課程では授業時数が
 増えて、更に教師の負担が大きくなる。しか

4

管理職の率先垂範により、教師の意欲も向上

■全教職員が協力して良い環境をつくる

同校の時数増への対応は、校務の精選や効
 率化などに加え、教師一人ひとりの熱意と協
 力態勢によるところが大きい。同校は非常勤
 講師が多く、時間割を固定制としているため、
 細かな時間割の調整が欠かせない。

畑先生は、「教務部で作成した時間割に不
 都合が生じた時、例えば急な出張等が入った
 先生は、他の先生と相談して自主的に授業を
 交替するなど調整をしてくれます。教務担当
 者はそれ以外の業務に専念でき、助かってい
 ます。教師同士のコミュニケーションが密だ

からこそ出来るのだと思います」と話す。

こうした背景には、「管理職が率先して行
 動で示すことで、教師はついてくる。それが
 良い方向であれば、生徒も望ましい姿になる」と
 という校長の考えがある。例えば、毎朝、教
 師が校門で生徒に声を掛けるあいさつ運動は、
 生徒指導部会の呼び掛けに校長が率先して応
 える形で校門に立ち、次第に教師も協力する
 ようになった。開始当初は照れていた生徒も、
 やがて自然にあいさつを返すようになった。
 校長が敷地内のゴミ拾いをするようになると、
 ゴミを捨てる生徒も激減し、部活動等でもゴ

も、校区内に大規模住宅が出来たため、生徒
 数は増加傾向にある。10年度は、全校で更に
 2学級増える可能性が高いが、教師の数がど
 の程度増えるかは分からない。今後の方針は、
 諏訪部校長と教務主任の畑先生とで検討中だ。
 「週1コマだけを少人数制授業として、残
 りは通常のクラスで行う方法も考えられます
 が、それでは生徒が落ち着いて学習できない
 でしょう。教師の持ち時間があと1、2時間
 増えたとしても、苦勞を上回る効果が見える
 少人数制を続けたいと、多くの先生が考えて
 います」（畑先生）

ミ拾いをしてくれるようになったという。

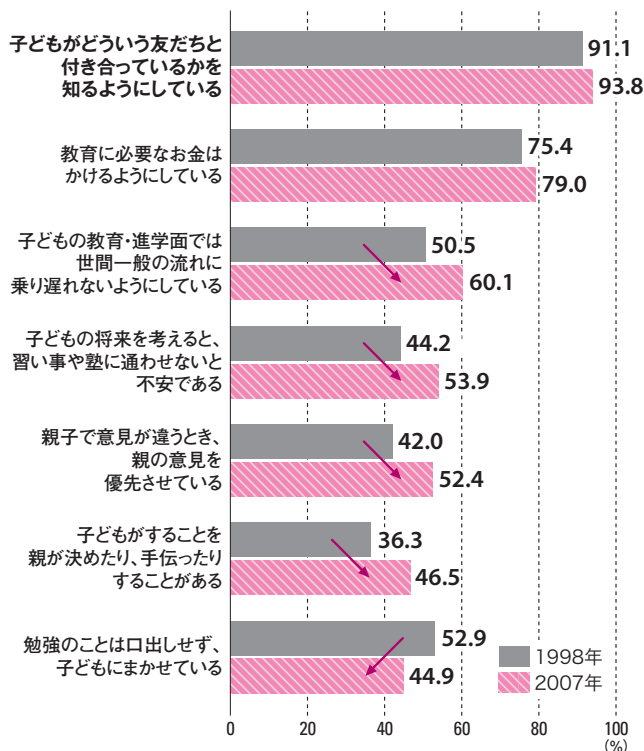
こういった意識は教師にとどまらず、用務
 員、事務職員らにも伝わっている。全教職員
 が学校教育に積極的にかかわり、生徒にとつ
 てよりよい環
 境をつくり、
 維持しようと
 する努力が、
 学校全体を明
 るく前向きな
 雰囲気にして
 いる。



事務職員が採った安価な花を使い、用務員が
 行ったガーデニングが、コンクールに入賞。人
 気キャラクターをデザインした花壇は、生徒にも
 「何だか安らぐ」と好評だ

1 この10年で高まる保護者の教育熱

家庭の教育方針（中学生の保護者）



◎家庭の教育方針について、保護者が「あてはまる」と回答した割合が最も高い項目は、「子どもがどういふ友だちと付き合っているかを知るようにしている」だった。

10年前の調査結果と比べると、項目の順位は大きく変わらない。ただし、全体的に見て、子どもの教育に関する保護者の不安が高まり、子どもへの関与も高まっている。

* 8つの質問項目のうち7項目を抜粋
* 数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

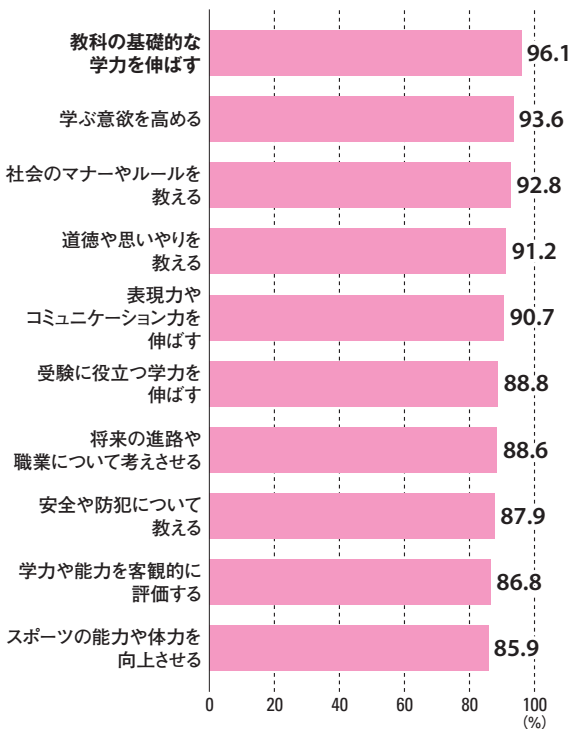
出典 / 「第3回子育て生活基本調査」
Benesse 教育研究開発センター

保護者は、どのようなことを学校に期待し、学校の取り組みにどの程度満足しているのか。ここでは、子どもの教育やしつけに関する保護者の意識について、特に学校の指導に関係する項目を中心に見てみよう。

保護者の意識

2 学校には「知」「徳」「体」すべてに高い期待

学校に対する中学生の保護者の期待（21項目中、上位10項目）



◎保護者が学校に対して最も期待する教育や指導は、「教科の基礎的な学力を伸ばす」（96.1%）ことだった。

高校入試を意識してか、学力向上に関する項目への期待が比較的高い。ただ全体的に見ると、「知」「徳」「体」すべての領域で学校に高い期待を寄せている様子がうかがえる。

* 数値は「とても期待する」「まあ期待する」の合計。無答・不明を除いて算出

出典 / 「学校教育に対する保護者の意識調査2008」東京大学社会科学研究所・Benesse 教育研究開発センター

本コーナーで紹介している調査結果の詳細はウェブサイトでご覧いただけます

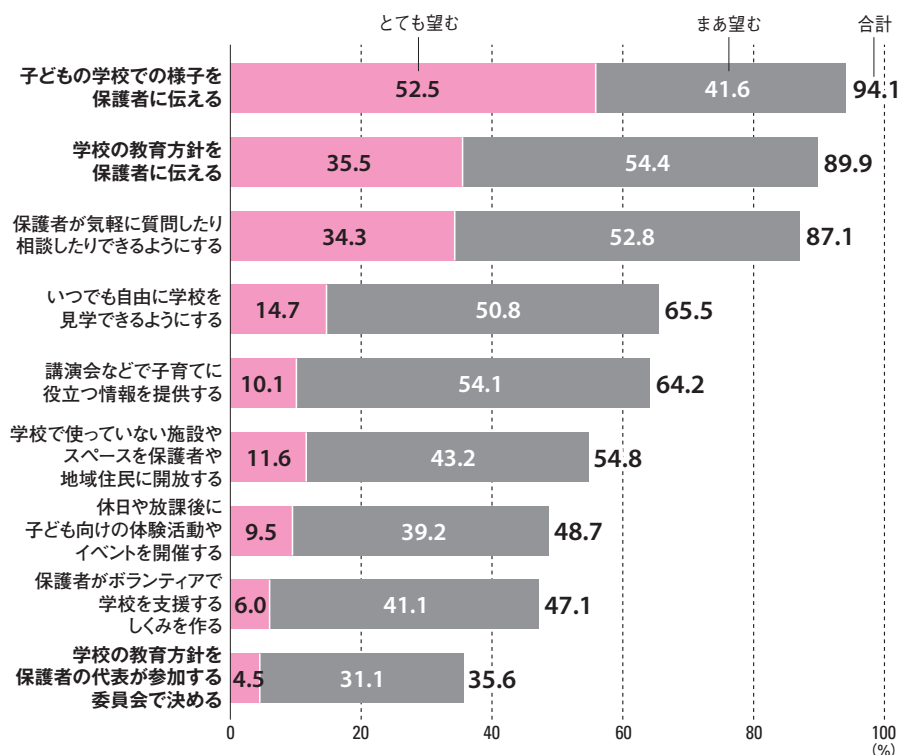


第3回子育て生活基本調査
<http://view21.jp/c9321/>

学校教育に対する保護者の意識調査 2008
<http://view21.jp/c9322/>

3 知りたい情報は「子どもの様子」「教育方針」

学校公開や学校参加に対する希望（中学生の保護者）



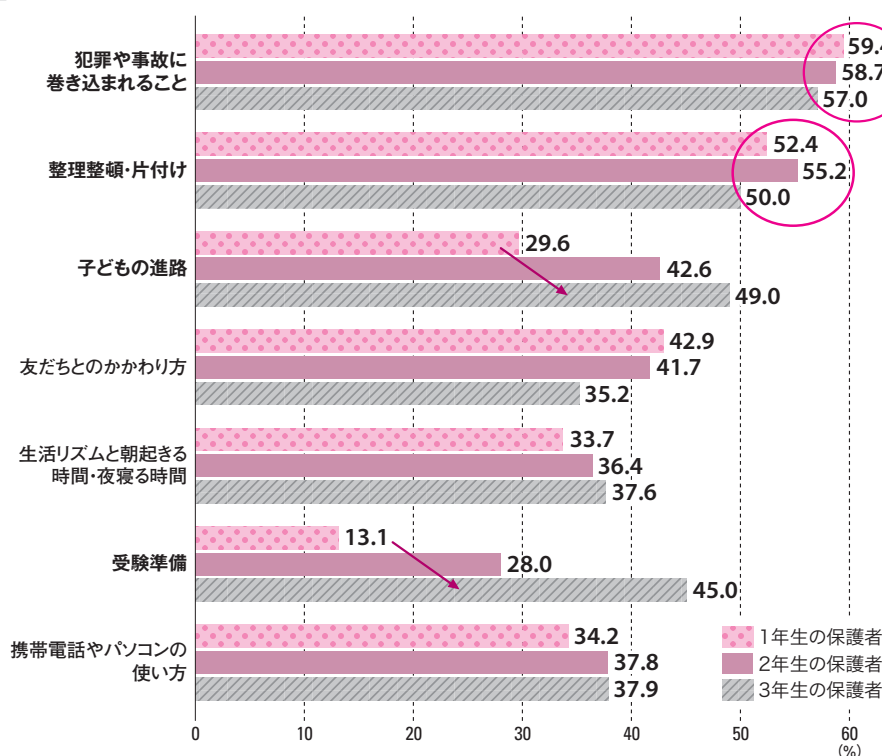
◎保護者は、学校が積極的に情報を公開することを強く望んでいる。「子どもの学校での様子を保護者に伝える」「学校の教育方針を保護者に伝える」ことを望む割合は、9割前後に達する。

一方、「学校の教育方針を保護者の代表が参加する委員会で決める」など、学校運営に直接参加することを望む割合は5割を下回っている。

出典／「学校教育に対する保護者の意識調査2008」東京大学社会科学研究所・Benesse 教育研究開発センター

4 保護者が気をもみ続ける「安全」「整理整頓」

現在の子育ての気がかり（中学生の保護者、38項目中、上位7項目）



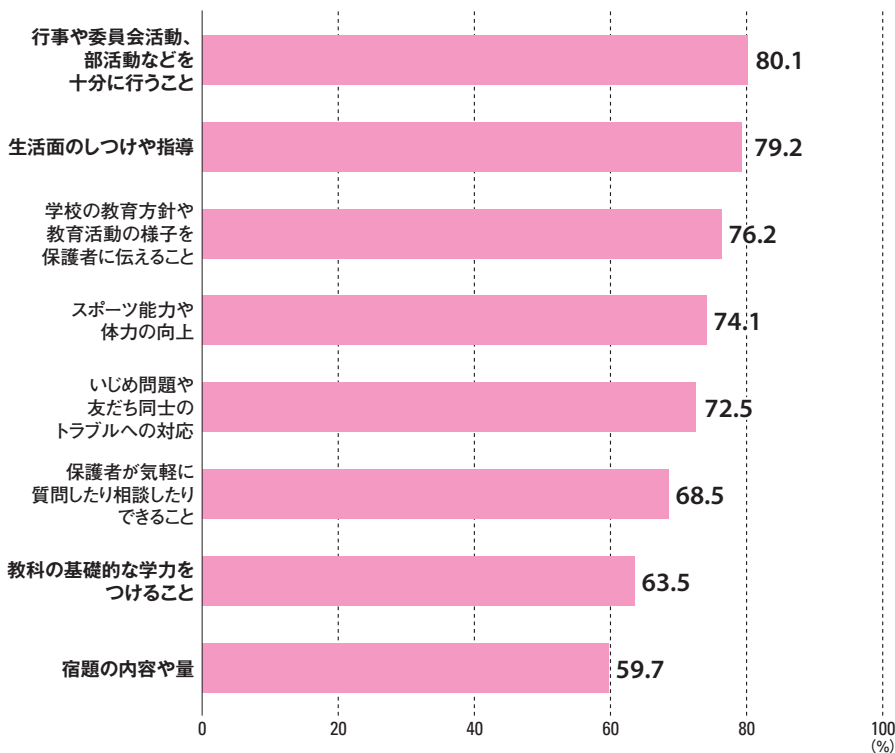
◎子育ての悩みや気がかりなことについて、どの学年の保護者も「犯罪や事故に巻き込まれること」「整理整頓・片付け」を挙げる割合が高い。この2項目は、小学生の保護者への調査結果でも1位、2位であり、保護者にとって、小中9年間通しての大きな関心事といえる。

「子どもの進路」や「受験準備」といった進学や学習に関する項目は、学年が上がるほど関心が高まっている。

出典／「第3回子育て生活基本調査」Benesse 教育研究開発センター

5 生活指導や特活の指導への満足度が特に高い

学校の取り組みや指導に対する満足度（中学生の保護者）



◎保護者の満足度が最も高い学校の教育活動は、「行事や委員会活動、部活動などを十分に行うこと」（80.1%）、次いで「生活面のしつけや指導」（79.2%）だった。

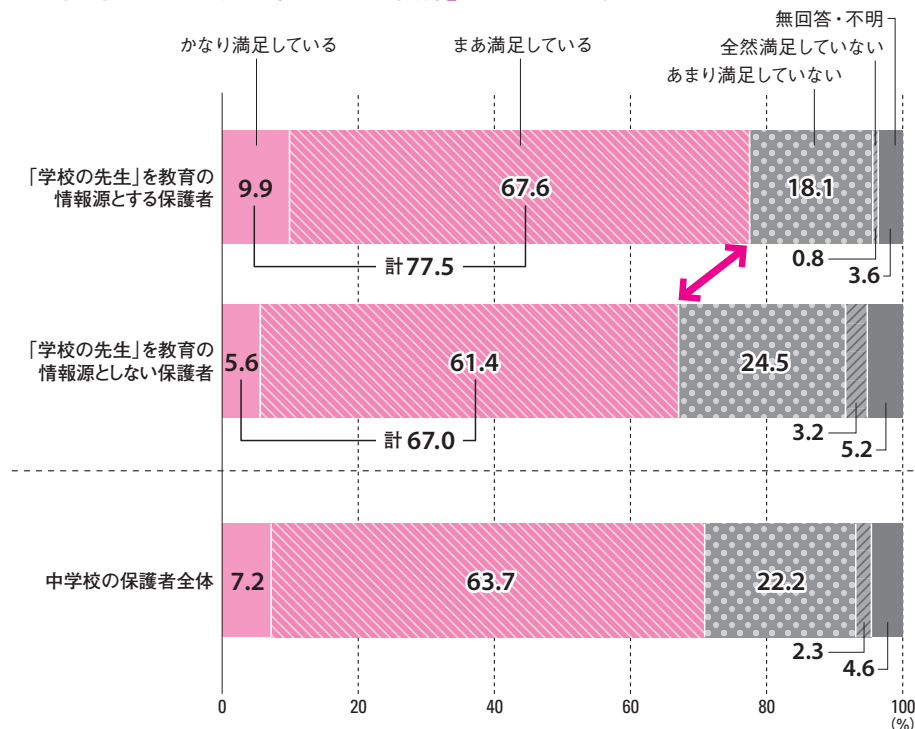
「教科の基礎的な学力をつけること」や「宿題の内容や量」という学習面に満足している割合は6割前後と、他の項目に比べてやや低い。

*数値は「かなり満足している」「まあ満足している」の合計。無答・不明を除いて算出

出典 / 「第3回子育て生活基本調査」 Benesse 教育研究開発センター

6 「教師」が教育の情報源であると満足度も高い

学校の取り組み・指導への満足度（中学生の保護者、「しつけや教育」の情報源別）



◎教育に関する情報源として「学校の先生」を挙げた保護者は、そうでない保護者よりも、学校の取り組みに満足している割合が約10ポイント高い。教師が発信する情報が、保護者の信頼感につながり、満足度を高める理由の一つになっていると推察される。

*「お子さまの「しつけや教育」の情報について、どこから（誰から）得ていますか」という項目（複数回答）について、「学校の先生」に○をつけたかどうかで再集計した

出典 / 「第3回子育て生活基本調査」 Benesse 教育研究開発センター

研修会や保護者会に役立つ！ 保護者の教育や子育て意識が分かる お薦めウェブサイト

文部科学省

義務教育に関する意識調査

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/06/05061901/gimukyouiku.htm

◎全国の小・中学生、保護者、小・中学校の教師と学校評議員などを対象に、義務教育に関する評価や期待、子どもの家庭での生活状況等を幅広く調査。学校教育で身に付けるべき能力や態度について、教師と保護者の意識の違いが分かる

社団法人日本PTA全国協議会

平成20年度 教育に関する保護者の意識調査

<http://www.nippon-pta.or.jp/>

◎文部科学省や各教育機関が進める新しい学校教育、学力格差の拡大、親子のコミュニケーションなどに関する保護者の考えが分かる

厚生労働省

平成16年度全国家庭児童調査

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0630-6.html>

◎保護者と子どもを対象とした全国調査。5年ごとに実施。保護者が子どもとよくすることや会話時間などが分かる

独立行政法人国立女性教育会館

家庭教育に関する国際比較調査

<http://www.nwec.jp/jp/publish/report/page16.html>

◎子育てに関する、日本、韓国、タイ、アメリカ、フランス、スウェーデンの6か国調査。調査対象は0～12歳児の保護者。親子のコミュニケーションの様子、子どもの生活習慣や最終学歴に関する期待など、国別の違いが興味深い

※上記は2009年10月時点での情報です

1456 出典

「第3回子育て生活基本調査」Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2007年9月、調査対象は首都圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）の小学1年生～中学3年生の子どもを持つ保護者7,282人。ただし、分析は母親のみ(6,770人)とし、1998年調査との比較は小学3年生～中学3年生の母親(5,315人)のデータを用いた。調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

23 出典

「学校教育に対する保護者の意識調査2008」東京大学社会科学研究所・Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2008年3月、調査対象は全国の小学2年生、5年生、中学2年生の子どもを持つ保護者5,399人（小学生保護者3,348人、中学生保護者1,972人、学年不明79人）。調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

次号
予告

学習習慣・学習意欲
について取り上げます

まとめ

保護者からの信頼を高める鍵は 学校の情報開示

◎この10年で子どもの教育に対する保護者の関心が高まっている（P.20 [1]）。学校教育についても、保護者は学力だけでなく、社会性の育成や生活習慣の確立など、多くの面で高い期待を寄せる（P.20 [2]）。背景には、いわゆる「ゆとり教育」による学力低下への不安や、保護者自身も「家庭でのしつけや教育が不十分」と感じていること（*）などが考えられる。

◎そうした中、大半の保護者は、学校での子どもの様子や、学校の教育方針を知りたいと願っている（P.21 [3]）。そこでまずは、「子どもの様子を伝えたいと思っています」という学校の姿勢を示すことから始めてはどうだろう。学校だよりや学級通信などを通して、学校が学級の状況や指導の様子を日頃からこまめに伝える。例えば、登下校時の安全指導や学級の友人関係など、保護者が気にかけていること（P.21 [4]）を踏まえた情報を発信するのも一案だろう。

◎学力の向上や社会性の育成について、自校の取り組みの相対的な比較や、子どもの力が具体的にどのくらい伸びたのかななどを客観的に表せる指標は少ない。このため、指導の成果を保護者に分かりやすく提示するのは難しいからだ。

◎学校の取り組みや指導には、7割前後の保護者が満足している（P.22 [5][6]）。これは、学校のためまぬ努力の表れだろう。一方、満足していない保護者や批判的な保護者、無関心な保護者も、少数派とはいえ一定数いる。

◎こまめに情報を伝えたり、保護者の話をよく聞いたりすることによる教師の負担は大きい。しかし、こうした取り組みは、保護者と学校との信頼関係を築く基礎となる。保護者の支援によって問題の拡大を防げる場合もあるし、学校への理解が深まるほど満足度は向上する。学校の教育活動を円滑に進めていく上で、かかった負担の大きさと同等以上の効果を得られるのではないだろうか。

*内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」(2007年2月)

保護者の信頼を得るための 情報公開とは

今回は、保護者が学校に望むことなどに関する調査結果と、保護者との信頼関係を築いている学校の事例から、学校に求められる情報公開の在り方について考える。

現状

保護者のクレームは増加 情報公開を強く望む傾向に

ベネッセ教育研究開発センターの『第4回学習指導基本調査報告書』によると、ここ数年で保護者の様子に変化が見られることが分かった。約8割の教師が「学校にクレームを言う保護者が増えた」と回答（図1）、「教師の指導を信頼している保護者」が「減った」と回答した教師も5割

弱

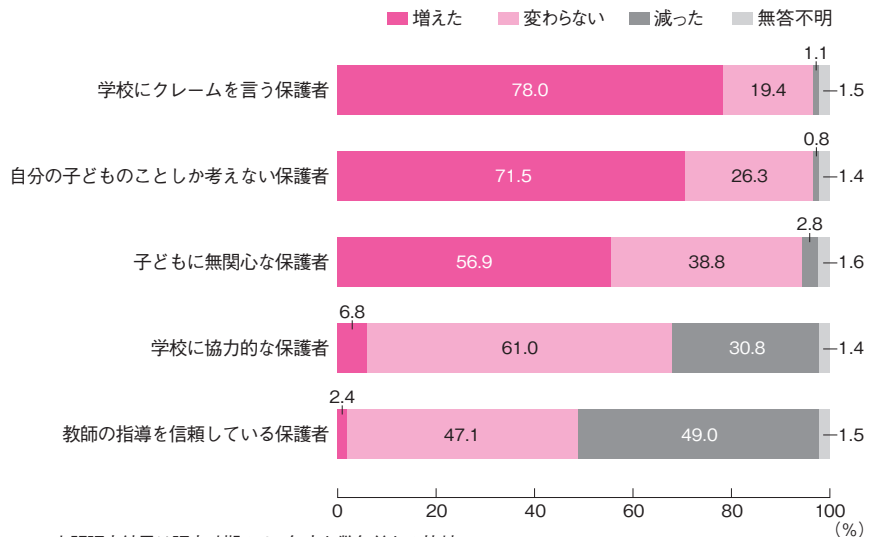
弱いる。では、保護者は学校とどのようにかかわりたいと思っているのだろうか。ベネッセ教育研究開発センター『学校教育に対する保護者の意識調査2008』によると、学校の積極的な情報公開への要望が強いようだ（*）。「子どもの学校での様子を保護者に伝

える」「学校の教育方針を保護者に伝える」ことを「望む（とても+まあ）」割合はそれぞれ9割前後で、この傾向は04年から変わらない（図2）。だが、同調査によると「学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること」に対する保護者の満足度は、他の項目よりもやや低く6割を下

回った（図3）。「運動会などのスポーツ活動」など目に見える活動に比べ、保護者から見えにくいことが理由の一つとして挙げられるだろう。そこで今回は、保護者との信頼関係を築き上げ、開かれた学校づくりに取り組む愛知県高浜市立高浜中学校の取り組みを紹介する。

* P.20 「ベネッセのデータでみる子どもと教育」にも関連データがありますので参照ください

図1 中学校教師が感じる保護者の様子の変化（数年前との比較）



* 上記調査結果は調査時期の07年度と数年前との比較。

出典

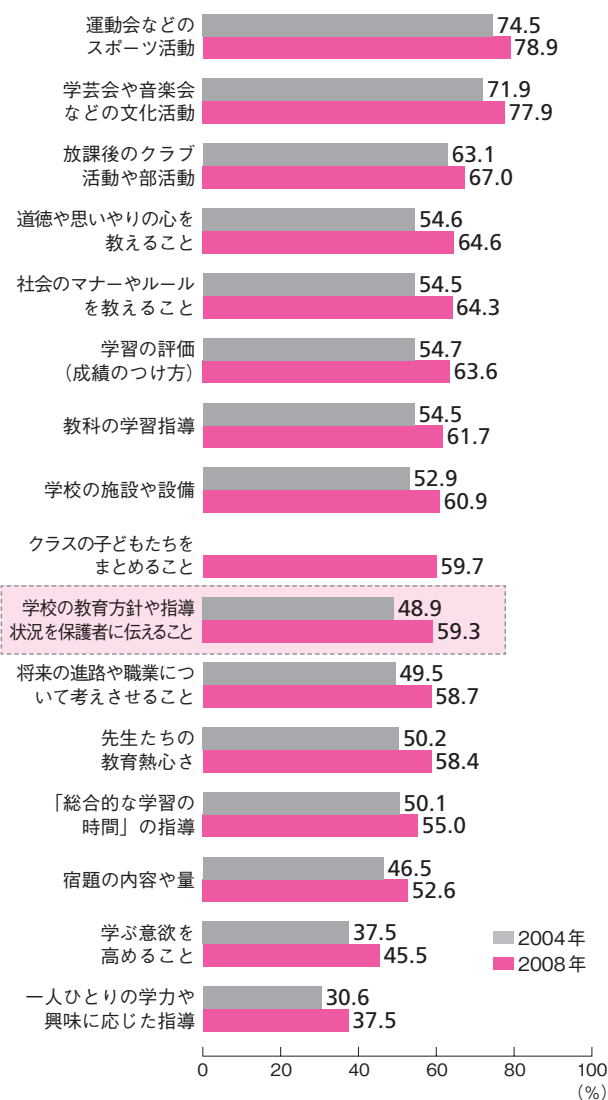
図1：『第4回学習指導基本調査報告書』
Benesse 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon/hon/index.html

図2・3：『学校教育に対する保護者の意識調査2008』 Benesse 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/center/open/report/hogosya_ishiki/2008/hon/index.html

図3

中学生の保護者が感じる学校の指導や取り組みに対する満足度（経年変化）

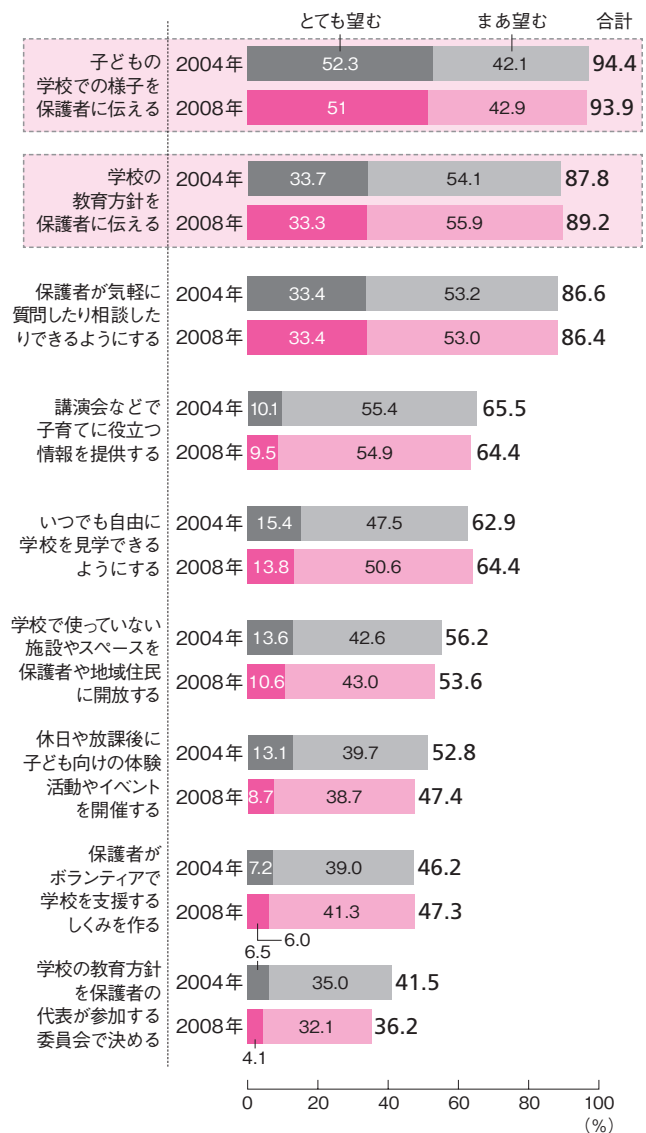
「とても満足している」と「まあ満足している」の合計 (%)



* 「クラスの子どもたちをまとめること」は2004年調査ではたずねていない

図2

中学生の保護者が感じる学校公開・学校参加の希望（経年変化）



* 質問項目はP21③と同一だが、値が若干異なっている。これは、経年比較用に異なる集計方法を用いているためである。

校内巡回やブログでの情報発信で 生徒のリアルな日常を保護者に伝える

愛知県 高浜市立高浜中学校

来校しやすい仕組みと 情報発信を重視

P. 24、25で見た通り、近年の保護者の変化などにより、学校と保護者の信頼関係の構築が困難化している学校も少なくないという。そんな中で、愛知県高浜市立高浜中学校は、「教育活動の質を向上させるための貴重な外部資源」として、保護者や地域と積極的に連携している。

例えば、09年度の重点努力目標として、同校では「生徒一人ひとりの学力の定着を図る」「『恥ずかしい』を実感し、自制する生徒を育てる」と並び、「地域に開かれた学校を目指す」を掲げている。では、「地域に開かれた学校」とは具体的にどのような

な学校なのか。校長の星野芳徳先生は次のように説明する。

「私たちが考える開かれた学校とは、地域の人々や保護者の方々が『また来よう』と思える学校です。そして、そのような学校に必要なのは、『来校しやすい仕組み』と『情報発信』の二つの機能です」

学校としてどのような取り組みが求められるのか、教師全体での共通理解を図るために、「開かれた学校」を抽象的なイメージで表現するだけではなく、実現のために必要な機能を具体的な言葉で明示することから始めた。そして、この二つの機能を高めるために、高浜中学校では保護者、地域と協働したさまざまな取り組みを、年間を通して日常的に実施している。

全クラスを巡回する 年7回の「校内見守りたい」

気軽に来校できる仕組みとしてまず挙げられるのが、「校内見守りたい」だ。これは、保護者が2時間目と3時間目の授業時間中に校内を巡回しつつ、1〜3年生のすべての授業を見学できるというもの。年に3回実施される授業参観とは別に、例年7回ほど行われている。授業や校内の様子を見て回った後、教師との懇談会が開かれ、保護者から感想や気付いたことなどが出される。

「学校としては、いつでも学校に来ていただいで構わないのですが、いつでも自由になるとかえって足を運びにくいものですよね。ですから、

高浜市立高浜中学校

1947年（昭和22年）開校。「心ゆたかな、主体性のある人間を育てる」を教育目標とし、09年度の重点努力目標の一つに「地域に開かれた学校を目指す」を掲げている。

校長	星野芳徳先生
所在地	〒444-1332 愛知県高浜市湯山町7-1-1
生徒数	883人
学級数	26学級（うち特別支援学級2）
TEL	0566-53-0279
URL	http://www.city.takahama.aichi.jp/takachuweb/



高浜市立高浜中学校校長
星野芳徳
Hoshino Yoshinori



高浜市立高浜中学校教頭
梅田稔
Umeda Minoru

あえて日にちを決めています」と星野校長。導入して既に3年以上が経過するが、今でも多い時には40人の来校者を迎えるほど、同校の保護者には広く受け入れられている取り組みだ。

保護者の最大の関心は、我が子を始めとする生徒たちの様子にある。懇談会では、授業中の生徒の表情や態度、1日を過ごす教室の雰囲気などについて自由に感想が述べられる。一方、この取り組みでは「教師が日々どれほど頑張って授業をしているかを見てもらうことも意義の一つ」と教頭の梅田稔先生は語る。

「保護者は面談や保護者会などを通して、我が子の担任教師のことはよく知っていますが、担任以外の教師のことはなかなか分からないものです。子どもにかかわるいろいろな教師の『頑張っている様子』を見ることで、保護者は学校に信頼を寄せられるようになっていきます。3学年を自

由に見て回れる『校内見守りたい』は、本校のすべての教師の様子を伝えられるチャンスなのです」

「教室の掲示物はもっと生徒に見やすく張った方がよいのでは」など、毎日教室に通っている者だとい見逃してしまいそうな指摘を「校内見守りたい」から受けることもある。一方、「生徒が理解できるように一生懸命説明してくれていることがよく分かって感動した」といった評価の声も毎回数多く寄せられる。そのこ

とが特に若手の教師にとって励みや自信となっていると梅田教頭は言う。

「とはいえ、今日は校内見守りたいが来るから……など構えてしまう教師はいません。授業参観と合わせると、毎月のように保護者を校内に迎えるのですから、先生方も慣れているようです。特に意識もせず、普段通りに授業を行っています。本校の教師は全員、いつ、誰に授業を見られてもよい、そんな気持ちだと思います」(梅田教頭)



年に7回程度実施される「校内見守りたい」の校内巡回。保護者は我が子の教室はもちろん、3学年すべての授業を見学できる



毎月1回、校長が主催する「共育を語ろう会」。テーマによっては、教師も任意で参加している

月1回、保護者と校長が自由に語り合う

毎月第2木曜日の午後7時から1時間30分、井戸端会議的な自由な集いとして星野校長が主催するのが「共育を語ろう会」だ。星野校長が同校に赴任した06年から開催している取り組みで、教育に関するテーマを星野校長が毎回設定し、資料(P.28図1)を選定した上で、保護者と自由に語り合う。「学力問題」、「部活動」、「ケータイ」、「環境教育」など、中学生の保護者が関心を持っている話題、その時々で社会で広く議論されているテーマを取り上げている。

「参加人数は各回10〜30人ほどです。ケータイなど保護者の関心が高いテーマでは、全国規模の調査資料だけでなく、高浜中学校の実態が分かるデータも出来るだけ盛り込みながら資料を作成しています。全国的な傾向なども大切ですが、保護者は『自分の子どもの学校の実態』に関心を持っていくものです。保護者が理解しやすいよう、また議論が活性化するように、資料作りには配慮します。学校としては気軽に語り合える

課題

フォーカス

保護者の

信頼を得るための
情報公開とは



「共育を語ろう会」で使用される資料は、毎回校長が中心となってまとめる。校内データが盛り込まれ、高浜中学校の様子が分かる資料となっている

雰囲気大切にしていますので、あえて議事録などは作らないようにしているのです」(星野校長)

「共育を語ろう会」は、テーマによっては教師も任意で参加する。校長がどのような発信をし、それに対して保護者がどのような反応をするのかを自分自身で確かめるためだ。それだけにとどまらず、自分の考えを校長や保護者に直接ぶつけるために出席する教師もいる。

「例えば、本校では今年度より、掃除を通して心を磨くため、1分間の黙想の後、無言で清掃に取り組み『自問清掃』を導入しています。清掃の時間を、生徒にとって『掃除をさせられる時間』から『自分を成長させ

る時間』へと転換していこうという清掃主任の教師の発案によるものです。この取り組みについても私は『共育を語ろう会』で取り上げましたが、この時の会には清掃主任も自主的に参加して、取り組みの意図などを自分の言葉で熱く語っていました」(星野校長)

生徒の日常をブログや印刷物で発信

保護者が気軽に学校に足を運ぶ機会を頻繁に設けると同時に、高浜中学校はさまざまな媒体を駆使した情報発信を積極的に行っている。

日常的な情報発信として最大限に活用されているのが、学校が運営する「高中ブログ」(図2)だ。1、3年、部活動、生徒会、PTAとカテゴリー別に日々の出来事をブログ

形式でアップしている。

「私が赴任した当初は、本校のホームページの情報ほとんど更新されていない状態でした。今では担当教師が中心となって、毎日のように更新しています。ブログにしたことで更新作業も簡単になり、校内の写真なども多く紹介できるようになりました」(星野校長)

ブログはアクセス数などの解析が容易なのも特徴の一つである。その解析から改めて分かったことは、保護者の関心が最も高いのは、「生徒が学校でどのように過ごしているか」と星野校長は説明する。

「調査データの結果発表や学校からのお知らせももちろん大切ですが、今日学校で生徒たちはどんな表情で1日を過ごしたのか、高中ブログを訪れる人たちはそこに一番関心を持っています。だから、私たちは個人情報に十分考慮した上で出来るだけ写真をたくさん掲載して、学校の様子が伝わるような情報発信を心掛けています」(星野校長)

一方で、印刷物を使った従来型の情報発信も重視している。学年便りや学級便り、進路便りなどは、各担当者の裁量に任されているが、「地域

に開かれた学校を目指す」が学校としての重点目標になったことを受けて、頻繁に配布されるようになった。

「学級便りを毎日発行しているクラスもあります。忙しい中での先生方の熱意には頭が下がる思いですが、生徒の様子や自分の考えを保護者に発信できるといふ学級便りのメリットをよく理解しているから出来ることなのだと思えます。教師として自分が何を考え、どんなことに取り組んでいるかは、具体的に発信しないと伝わりませんから」(梅田教頭)

また、年度当初に全生徒に配布するリーフレット「高浜中の教育」は、家庭で1年間掲示しても破れにくいように厚手の用紙を採用し、更に見やすさを重視してカラー印刷にした(図3)。

「学校の目標、保護者に参加をお願いする年間の行事日程などが記されていますから、私たちとしてはぜひ冷蔵庫など家族全員の目に付きやすいところに張っていただきたい。そこで紙質と印刷を見直しました。実際、家庭訪問に行くとかかなりの家庭で壁などに張っていただいています」(梅田教頭)

インターネットや紙媒体を駆使し

保護者の信頼を得るための情報公開とは

ている高浜中学校の情報発信は、いずれも保護者が学校に足を運んで目にしていくかのような生の情報の提供、そして実際に学校に出掛けてみたくなるような誘導を重視している。「すべての情報は、子どもたちが毎日学校でどう過ごしているか分かる

図2 高浜中学校ブログ



ほぼ毎日更新される高浜中学校のブログ。同校には、PTAが運営するブログもあり、学校と保護者双方が活発に情報発信を行う

情報公開と連動した学校評価を実施

このように、保護者への情報公開を積極的に行っている高浜中学校では、学校経営の指針の一つとするために、保護者からの情報収集も重視している。

師が生徒のためにもっと頑張ろうと強く思うようになったからだと思います」(星野校長)

ものでなければなりません。それがあって初めて保護者の安心につながるのです。また、このような情報発信の工夫をとくとん考えていくことで、教師の意識が変わってきました。『質問清掃』のような取り組みを自分で考え、提案する教師が増えたのです。情報公開を通して保護者や地域の支えに気づき、一人ひとりの教師が生徒のためにもっと頑張ろうと強く思うようになったからだと思います」(星野校長)

「学校評価の一環として、保護者に対するアンケート調査を実施しています。学校が掲げた重点項目がきちんと取り組まれているか、保護者の目で評価していただきます」(星野校長)

09年度の場合、質問は12項目。「開かれた学校を目指す」に関しては「授業参観や学校行事にはできるだけ参加している」「職員は、電話で問い合わせをした際や来校した時、誠実に対応している」などを保護者に尋ねている。

「学校を評価してもらうには、学校のことを知ってもらわなければなりません。『お子さんは授業に真剣に取り組んでいると思うか』と聞くのであれば、それを実際に知ることができる機会が必要です。そのための情報公開なのです。アンケートを通して、学校は具体的にこういうことを重視しているんだと保護者に伝えることが出来ますし、教師も自分たちは何を大切にしなければならぬかが再

図3 高浜中の教育



リーフレットは年間を通して家庭で掲示されることを意識して作成された

認識できます。評価のための評価で終わってはならないと思います」(星野校長)

事実、星野校長は「校門が閉まっている場合は、来校者を校門の外までお送りする」「外部からの電話には、学校名、職員名を名乗って、丁寧に対応する」など、社会人としてのマナーの向上も「開かれた学校」の実現には不可欠と考え、教師たちに配慮を呼び掛けている。

「保護者は学校の様子が知りたいと考え、私たちは保護者の考えが知りたいと考えている。それはどちらも『子どもたちのため』です。思いは同じだからこそ、学校が情報公開することで関係が更により良いものになっていくのです」(星野校長)

学習は「団体戦」 校区全体で学習習慣を確立

生活習慣や家庭環境、心の安定までも含めて学習環境をとらえ、保護者と連携して家庭学習を充実させようとしている秋田市立城南中学校。意欲が結果に結び付くような効果的な家庭学習のあり方を追求している。

保護者や小学校を巻き込み、「家で勉強」の習慣づくり

意欲はあるけれども、学力に結び付かない生徒がいる。秋田県独自の学力調査の結果から、そうした課題が浮かび上がったのは2006年度のことだった。教務主任の草薨祥子先生は次のように振り返る。

「『勉強が好きだ』と回答しているにもかかわらず、得点が低い生徒がいました。意欲はあっても、具体的な学習行動が伴わなかったり、学習方法・学習習慣そのものに課題を

抱えたりしている生徒も見られました」

学習行動の基礎となる「学ぶための力」に課題があると考えた同校は07年度から家庭学習に力を入れる。

「単に家庭学習のノウハウを伝えるのではなく、生活習慣や家庭環境を含めて、学習環境を総合的にとらえて改善していくための方策を考えました。家庭学習は個人のもので思われがちですが、『団体戦』で取り組むべきだと思っています。周りが勉強する雰囲気になっていけば、自分もやる気になる。教育活動全体を

通して働き掛けることによって、生徒や保護者が共に家庭学習への意識を高めることができるのではないかと考えました」（草薨先生）

まず取り組んだのは「家庭学習の手引き」の作成だ。保護者向けのメッセージが充実しているのが特徴で、勉強機の確保や食事のバランス、決まった時間に机に向かうことなど、生活習慣に踏み込んだアドバイスや、それらがきちんとできているか確認するチェックリストなども掲載している（図1）。同校の保護者は学校への信頼が高いものの、そ

図1 「家庭学習の手引き」保護者用チェックリスト

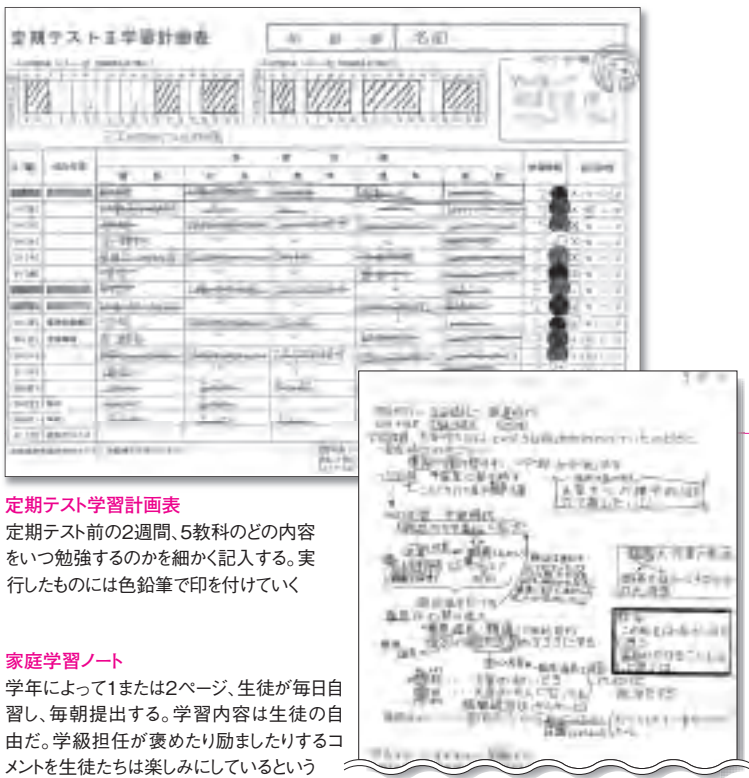
	努力している	時々考えている	全くしていない
①子どもの良いところを見つけようとしていますか。			
②指示をする際、子どもが理解できるように説明をしていますか。			
③子どもに一度に多くのことを要求していませんか。			
④子どもへの指示・説明は、簡潔にポイントを押さえるようにしていますか。			
⑤子どもが勉強でつまずいた時、それを一緒に見つけてやろうとしていますか。			
⑥子どもの考えていることをわかってあげていますか。			
⑦日頃から、子どもに明るく接しようとしていますか。			

「家庭学習の手引き」には、保護者に対してメッセージ性の強い内容が盛り込まれている

れがかえって「勉強は学校でするもの」という意識になっている面もあるという。そうした保護者にも家庭学習の重要性を認識してもらうのがねらいだ。年数回のPTAでも、必ず家庭学習について説明している。

また、家庭学習の定着には、小学校との連携も不可欠と考え、07年度から取り組みを進めている。校区の三つの小学校と「家庭学習の手引き」のデータを共有。各小学校ごとにカスタマイズ版を作成してもらい、校区全体で家庭学習習慣の定着を図っていくこととした。

もちろん生徒の意識を高める取り組みにも力を入れる。「家庭学習ノート」（図2右）は、その核となる



定期テスト学習計画表

定期テスト前の2週間、5教科のどの内容をいつ勉強するのかを細かく記入する。実行したものには色鉛筆で印を付けていく

家庭学習ノート

学年によって1または2ページ、生徒が毎日自習し、毎朝提出する。学習内容は生徒の自由だ。学級担任が褒めたり励ましたりするコメントを生徒たちは楽しみにしているという



図2のうち「定期テスト学習計画表」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c9341/>

取り組みだ。始業式当日に1冊の大学ノートを全生徒に配布し、宿題とは別に自分で見付けた課題を学習させる。学級担任が毎朝点検し、コメントを一言添えて返却する。1年生の最初の定期テスト前には、学級担任がテスト勉強に向けた「家庭学習ノート」の活用の仕方を指導する。研究主任の石塚雅子先生はノートの意義を次のように語る。

「家庭学習の習慣付けには、生徒と学級担任の信頼関係が欠かせませ
ん。学年によっては『家庭学習ノート』に1行日記などを書かせています。悩みや進路の不安を普段は言葉に出せない生徒が、『家庭学習ノート』を通して心の声を打ち明けることもあります。生徒の心の状態を把握し、信頼関係を深めるきっかけになります」
更に、定期テスト前には「学習計画表」（図2上）を立てさせる。これも毎日決まった時間に机に向かう習慣を養うツールになっている。

さまざまな「分からない」に対応できる仕組みを整える

「家で何を勉強したらいいの分からない」という生徒のために、国数英の3教科の基礎的な練習問題を3学年分、パソコンの共有フォルダにストックしている。長期休暇や連休の課題として、教師が必要に応じて自由に取り出して使っている。

分からないことがあっても自分から質問できない生徒たちが、気兼ねなく質問できる時間も確保している。08年度までは「補充学習の時間」を週2回、6限目がない日の放課後に25分間設け、学級担任が教室内を回って個別の質問に応じた。また夏休みの5日間、1日3コマのサ

マースクールで質問の時間を設定している。サマースクールは同校が長い間取り組んでいる夏の学習会だ。

こうした取り組みによって、県の学力調査などの結果に意欲が反映されるようになってきた。課題の提出率も10%上昇したという。今後の課題は、予習より復習、難しい問題より簡単な問題に家庭で取り組む傾向への対応だ。

「復習から予習へ、質的な転換をどうやって図るかが先生方の共通した悩みです。生徒に予習させた家庭学習の内容を次の授業に組み込むなど、課題の出し方と併せて授業の方法を見直すなど、更に教師の働き掛けを工夫していきたいと考えています」（草薨先生）

SCHOOL DATA

秋田市立城南中学校

◎1966（昭和41）年開校。秋田県内で、1、2を争う規模の学校で、部活動が盛ん。学区には、3世代同居の伝統的な農村世帯から都市近郊型の核家族世帯まで、多様な家庭が混在する。2007年度、同市の委嘱を受けて「確かな学力を育てる指導と評価の一体化」を研究した。

校長 加藤義夫先生

生徒数 702人

学級数 22(うち特別支援学級1)

所在地 〒010-0035

秋田県秋田市榑山城南町4-1

TEL 018-834-2367

FAX 018-834-2368



秋田市立城南中学校

草薨祥子

Kusanagi Shoko
教務主任、国語科担当



秋田市立城南中学校

石塚雅子

Ishizuka Masako
研究主任、音楽科担当

テーマ：教師生活での「悔しかった!」「恥ずかしかった!」「危機一髪だった!」出来事

今回は三つのテーマの中から自由にエピソードを書いていただきました。中でも、部活動の指導に関する悔しい出来事や、新任時代ならではの緊張した経験を書いてくださる方が多く見受けられました。

〈悔しかった!〉

◎バレーボール部の指導をしてきて、6年目にして理想のチームをつくりあげることが出来ました。全国大会ベスト8入りも夢ではないほどでしたが、残念ながら異動になりました。結果は、市大会で優勝したものの、県大会では応援している私の目の前でフルセットで敗退。最後まで監督できなかったことが悔しかったです。

[愛知県/J中学校/M・O]

◎学級対抗の行事で結果が出なかった時は、夜眠れないほど悔しいです。悔しがる生徒の姿を見て、逆に元気をもらっていますが……。

[鹿児島県/K中学校/K・S]

◎熱心に生活指導、生徒指導をしたつもりだけでも、保護者に受け入れられない場合が最近、増えています。授業以外の場ですが教師として自信を失いがちになり、ため息が出ます。悔しいです。

[埼玉県/Y中学校/S・O]

◎新任教員として担任した学級の生徒が、オートバイを運転し、事故を起こしてしまいました。当時の勤務校の校則では「無免許運転は退学」としていたため、更生する機会もなく退学させることになりました。日頃から面倒を掛ける生徒でしたが、どこか憎めない性格でしたので、事件があったときは他人事ではなく心配しました。また、事件を起こした直前のSHRで「自分の行動に責任を持って」という内容の話をしたばかりでしたので、もっと私に魅力があったなら、あの生徒は私の言った内容を理解できていたのではと、今も悔しく思います。

[栃木県/B中学校/H・T]

〈恥ずかしかった!〉

◎教壇が存在した時代、授業に夢中になって、そこから転げ落ちたことがあります。一瞬、何が起きたか分からず、黒板のチョークの文字が突然、斜線となって、黒板の下に消えているのを見て、事態を知りました。生徒の反応は推して知るべし、です。

[東京都/K中学校/A・T]

◎10年程前からパソコンを使った業務が多くなりましたが、当時は慣れていなくてデータを消してしまい、迷惑を掛けました。

[広島県/I中学校/S・A]

◎文化祭の演劇で生徒と一緒に演技をした時のことです。文化祭当日、怒るシーンを本気になって熱演していたら会場が白けてしまい、恥ずかしかったです。

[神奈川県/T中学校/S・Y]

〈危機一髪だった!〉

◎今から28年前、数学教育の全国大会でのこと。教師2年目で授業者として研究授業をしましたが、思った通りの授業をできず、汗びっしょりになって進めていました。事後研修会でもたくさん質問や意見が出され、どう答えてよいのか困りました。

[北海道/K中学校/K・I]

◎以前勤めていた学校で、落ち着きのない生徒に注意をしたところ、その生徒が興奮し、私は胸ぐらをつかまれて教室のガラスに押し付けられました。ガラスが割れて、大きな破片が首筋の襟のすき間に入った時には「ひゃっ」としました。幸いけがはしませんでした。一つ間違えたら……と思うと「危機一髪」でした。その後、本人や保護者からのきちんとした謝罪も無く、うやむやのうちに時が流れ、悔しい思いもしました。

[岡山県/T中学校/T・O]

◎たくさんあって、何を挙げればよいか難しい。ある意味で、教育現場は「危機一髪」の連続です。

[香川県/T中学校/S・M]

次号のテーマは

「もし1年間、教師以外の職業に就くとしたら?」

このコーナーでは、毎号異なるテーマについて、先生方から頂いた思いやご意見を紹介します。テーマに関するご意見は小誌ウェブサイト(裏表紙参照)からご投稿ください。お待ちしております。

編集後記

指導の質や先生方のモチベーションを維持・向上させつつ、授業時数を確保することがいかに大変かを、特集の取材を通して改めて感じました。事例でご紹介した学校の取り組みが、次年度以降の教育課程編成・運用の参考になれば幸いです。そして、授業時数を脅かす新型インフルエンザの流行がこれ以上広がらないようにと、祈らずにはられません。(久保木)

VIEW21 中学版 2009 Vol.3

2009年12月1日発行/通巻303号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

印刷製本 大日本印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 柴崎朋実、山口慎治
撮影協力 川上一生
イラスト協力 幸剛

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009